画乃一覧

12
881
10

葵

巻名　はかなしや人のかざせる葵ゆへ神のゆるしのけふ
をまちける　花宴とまて此を名とせると源氏廿一
二歳の春より此巻にかゝれたるを花宴は源十九の時乃事
とかきたり故に廿歳の一年の事は物語にみえたる所なし
旧説に此巻と花宴乃同年なるよしいへとこれにはさして
六のさうらひ一のさうらひにかゝる二条大臣也花宴は三
月下旬乃事也此巻の斎院乃御禊は四月也夜月乃
事いくらも此日数もなしさるに朱雀院乃御譲位冷泉
院の立坊源氏元乃任大将斎院母后の下定など
乃事の此巻にあるへきことや二十歳の花宴の年に
八源氏宰相中将年十九なれは同年なれは源氏
十九歳なるへし大将に任給へし然は前乃葉中巻に廿二歳

[seal stamps]

てまおはく大将事給也しかり彼巻の詞にもおほつかな
三類云花宴年八歳上十二也葵巻に新枕事ありて十
二歳にて東妓のあるまゝひさしくさるにおもかけれは驚
云にも女子は十四にて嫁して夫婦となれは男はいまた
見えさりきと夫婦也八月のことになると云也四類云花宴の年
ハ冷泉院二歳東宮也蹴鞠也にも春宮にて十一歳の時元
服なとと見えされは二年のことなる也五類云朱雀院の
法楽ハ二度あり桐壺院に入給はんとて法楽あり又五
十の賀に入給はんとて法楽あり此巻の法楽ハ二度
の法楽也御澄も見えし給ふ初度の法楽同月にあるへし
や同月の事は一例なる也六類云伊勢斎宮と一
條に一度立給ふと給ふ中宮の斎宮に立給ふ
八条朱雀院更衣の後の事也甚ふ此巻に斎宮立

うちへ参給へりしを思ひまくさたま給ふにて此秋六條
とあるはされは朱雀院の法ゆるりを受給ふは葵巻に
見えぬ前の事なるへし此六十の類にて源氏の任大将
八廿二の年也事也定給ふ也
解 巻名ハ花を見て号なとくのうさせる葵ゆへを源内侍う
よめる也賀茂祭の祭のことをかさしともよめる也此巻ハ花
宴の巻と花宴の年に次年の正月初よりのことあり
源氏廿一歳よりのこと也花宴の巻と此巻との間に朱
雀院は内位を讓給て并即位大嘗会等の事あ
るへし 細 巻名ハなれしやくのうさせるも源内侍のよ
める也賀茂祭のことを挿頭ともよめる也源氏廿一歳より
廿二歳の正月まてのことあり花宴ハ十九の年此四月
まての事なり廿の年の事ハ物語のおもてにみえ侍ら

也花宴は廿一の歳あり十九の四月以後に廿二の巻乃
ものあるへし　弄花年に同

世中かはりて後　花　世中かはるとハ桐壺院の御位をさり給ふ事を
朱雀院にゆつり給ふ也此巻ハ花宴の年より二年をへたて
去年の事なり成へし但花宴の年になしては廿二のとしの事をいはゝ
なんの注んはひちかく也はま廿二の年花宴乃後
夏秋の事はあまり人さすや　細　桐壺の帝位をおりさせ給ふ也
玉　源氏廿二歳の事なりと云へし弄花ハ一年此間也桐壺の天
皇位をおり給ひ又朱雀院治位に即給ふ又ある宮春宮
にたち給ふ事を実に世中かはりてとハいへり
御即位ありしを指されし　細　朱雀院代始なれは也源乃父
宮の治代かはる此事にしたかふ注んに指さやすからん
なれはなる也　弄花　御治代かはりたる心なるへし　花説

いとゝ　花　藤壺中宮の御事をさへ人のやうに添て
そひ給はぬひ給へるをといへり　栄　おほかたをも待てよ
つき藤壺の志りとそひおほしませは猶ちかきとも也
待君の御んことなさもそふのやうにおほしきこゆ志のひかり
なきを待きこえて　花　大将に成給ふ也かなしきこゆ志のひ
ありさまも侍る人さなる也　弄　源氏大将に任し給ふ也
此間にみな大将とかんしたるを栄花卅九大将にて三位中
将宰相に成たる也給ひて大将かけさせ給ふ宰相の大将か
也中のこゝさするいとめでたくいまめかし　細　源乃大将かけ
成給ふ也兼職(ケンショク)なる故にかくしきこえ給ふらさきなるを
なれと也　栄　源の大将に任し給ふなるを此巻にみえ
さは紅葉之賀とはかり給ふさきを給へる同年此事とみえ
ある人さすや

さともしことも御はかりまされおとしめ給ふさまも
みや　細　六条御息所なるとも
あまたの御かた〳〵をすきさせ給ひつゝ御めをもかけ
いまそましてやすからす　細　更衣也　花鳥同
河右　我もと思ふ人々とあらそひねたみ給ふやうなる人のまれと思ふをね
思ふ人のやうみてそねみ給ふ程なと　弄　桐壺の更衣に給ふ
給ひて清りとまはりの多くは夜壺とそねひ給はさるも也
細　清凉殿にて夜まり人のやうに夜壺よそひおはしまさす
更に待るうれしと也
いまは后ハ心やすくしう御はもとすやうちよのぬけて思ふ給へ
花　朱雀院の位につき給ひて弘徽殿女御を皇太后宮と
申也　細　弘徽殿もやうに夜壺と一所にまし渡らせを
心やまりしまて内よのとましましほ也　栄　夜壺の中にての位

故よと后と申也弘徽殿女御朱雀院位此故よ
内よ待る也
をちこちへ人より心やすくをもとなるおほえたに主の世の身にくらうてやうかとせさまを給
ハ清あそひしもとこのよりの世の身にくらうてやうかとせさまを給
けし　細　夜壺乃清る也
とれは程もの侍らて　細　院中とりも也
栄　桐壺の清位乃時よりともよる御さる人給とも也　花　冷泉院を
まろう春宮をそのとまて思ひ申給
春宮ととりる事の家よ始てみなるいまに立坊の事
のちまうるなる人し　細　冷泉院立坊乃事又よのまゝに源典
某の年のなる方よ立る人にも也　栄　春宮よ立坊故よ清
封門を細しむりしまことある也清の乃清んも絵洞す
ましてそかへも也

はしたなきことをし給ふなと思ひ給へて　細　夜居も

くさはひとてしや物語とも也

大将の君はやうやう御心さへとくつき給ても　花　源氏君を大将と

いふ事ハ此卷よりもをしはかる也大将ハ参議よりも兼相

をも兼帯する職也源氏ハ此時参議乃大将也

細　此時参議大将也子の巻に廿ニ一あまりて大将を給

とあり参議にて大将を兼する例河海にくはしく見え

なとよりも宗花物語にも大将にて三位中将宰相に

なりせ給へく大将ときこえ給に宰相大将とそ申しさす

るハとめてたくいへるハ也ハかりぬ二条関白師(モロ)通(ミチ)

の事あり

物さまハかくる花物かたりにもと物語にて　孫　源乃ん也下に

あはれなるよろこひてや　宋　源氏のよろこひきこえの給心也

すくよかの六条院にまゐりと思乃法ならし此　細　物語の作者也

みなさるやうに出仕もし也紫式部の婿なりし故斎宮にもなり給也

弄同　宋　例の物語めきてかゝる也此氏物語ハなきことに

やといつるなり

斎宮の姫宮斎宮にまゐり給ひしそ　花　斎宮とハ本宮と辞(ジ)

退(タイ)し給ふと申ハ一条院の御時にしも坊とハ本宮と称(セウ)

せらるゝ也坊ハ中宮ハ斎宮の御むすめ母ハ六条御息所也

斎宮卜定ハ去年此事なるへしさすれや此秋野宮に入

給ふとかんもゐるをみえぬ也明年ハ群行(グンギヤウ)なるへし

弄　秋野の宮也斎宮ハ清涼殿にて一度まゐりて給ふ朱雀

院清涼殿にはらひを給て斎宮の卜定ありしと見えたる

此年より一年さらに年にまかりてとふりて大内下宮

なとくるまて三年めにて参り給ふへき也　細　斎宮とを

斎宮坊を辞退しきこえんと前坊と云也斎宮ハ前坊の
給へる秋好中宮去年朱雀院の代の始に卜定し
て斎宮となさせられて去年野宮に入給ひ明年
くたり給ふ也　宗　前坊の斎宮とやらん也御位に立給
いて辞退し給ふと前坊とやせ也　桐壺院の御舎弟也
此方ハ六条御息所の姫君斎宮にて立給也秋好中
宮とやせ也御年十三にて成給也朱雀院の御代に斎宮
に立給也御坊落ハふ吉なれはや也其後ハ御門崩御の時
帰京とや也
大将の御心もさこそはいとこゝちのまゝにもあらぬとおもさるゝことあれはお
ほさかのうしろめたさにむねもとゞまりて　細　御息所を源氏
のかけさため給也　宗　御息所の心也源氏をも云とのかゝき
給ひても今されハ斎宮の御ともされくおほしますにおほ

よそて伊勢へくたり給ひなんとの御心也下れハ心ほそ源を
恨給ふへき也
くもりやさはれまうしかりそてようをおほしいてけり
細　源の御心をおもひそらうれハ斎宮にまうしてとうせや
さなまし也とわりなき也
院にもさる御心ともきこえさせて　細　父御門源に出家
給之　院ある也　宗　桐壺御門の御心とおほし給ふ院ともや也
むかしのいと面ん成けるおほしめし給ひけるとおほく
しうとしそのたるほとにまかて出給ふかなとおもしき
こと　細　前坊ハ桐壺院の御弟也
源氏の御息所にあひ給をよそにきこえしてゝ　宗　先坊のおはしまし頃
くしいハまてかほしまさけるとの給ふ也
斎宮をもことれはさるれにかん思へきといひけるたつ

きてもわろかるへからんこそよからぬ心のおこさしめ
たりせてかくとも見えさせ給ふをいと世のもとを見給ひぬるを見
おとなしきをも皆人しれぬ人しられは　細　弥六文乃侍るをも哀は
そのかたく物ほとや
哀侍心ちかきもたにも思ひまゐらするはかくまうさゝせ
ひ給　細　源の心かとも也　栄　院の侍りつさめとゆか給く
乃源氏侍ん也
人乃さしめらちらもの　きことちすくられともおくこに
まそおりて女のうちとおかわひそとの給ふとも　細　侍心の法題
葵上まて当家法息源の物乃またに浪給ことたにうまへり
ましらぬ人乃物ほとをあさとそさうしめしつおさまんと
こさせおそろしきれけうしてまゐらすくもまうて給ぬ
花　前斎宮よりまうさ画給しは也　細　前斎宮にゐることを物ほ

ろまをみくも思さりめして候也　弄花同
又かく院のみもさらしめしの給ひひさしに人の法名をも哀とお
もむそれうものしういとわしさにいとしやんおとなしくなる
ろうし給はとちみも思ひ給ふ給へと　弄　哀の法教訓まよ
也源のとて物ほともてん也　栄　法息源乃侍るすよ法さて
哀人のはさめとも心かちられもちしおもろうれてまゐまて
哀し給ひたぬまゝまして院のみとうやうにの給へるも大切ま
ハ思給ひかくしむく給との侍ん也
まゐらおしきれてハわさきをまゐて見すかれし給ふは
細　うやうに院のもとうくれるすくさらしめしまいらする玉
くしいまうる思ひ給ふ也
おもいとみけるすれ法よもひれほとをもうしうおかり
て心とまも給ふとぬきしこさるれと　花　法息所さ廿九源

氏ハ廿一見とてみせさするといふ也 聞 此次年清息沉
廿五くわ度内と見ん給とあるを 細 清息沉ハ源より八の
このかミ也此時清息沉を廿九ちるへし源ハ廿一也此次
年清息沉廿五くいる内とさ給と沂りかく年も
ましるるゆへは常に對敵のんあるまじき也
それはまさりひとあるさ度はまもてあるして 流は実はめ
いま世中此人をもまきぬはよそあるにける残 聞 源氏
のんと云清息沉のもしまさにまてさうやうにまとをを
て源かしぬと清息弥ハうしあをなる給也
細 源のんと云清息弥乃清乳とはまてさうやうに物も
てまさそてもてあすの給と清息弥へうしあしく云給也
あかうしもあくぬ清んのほとをいかへうおけしあけき
あうう源るをとさく給すも 栄 清息沉の清心也此すぬ

流 たし給ん世中此人まてぬもあるれは源氏のあさく
思給とと源行せ也
河さうかの姫君八心そて人はみつとをあう物あをいたちれま
清まもおりし清にぬかうなとをはさくしあすは清りまとそて人は
多くたしてたちくハもてあすし給をぬ清らしさと思をも
とまとあうもおゆりとぬる 花 源はほあみおすひき給
いぬ人也清るうし文たしぬあするとハおくしぬ清もて
あすとと人みまたとれあるを源もほめ給ふ也
細 桃園式ア卿の清女也は女は源はまてまうほのさほと
みして始給たして人也清息弥のことくみさくなとあほ
たも也第中未忠に人のうりし時承まうとう事也
栄 権斎院
大度にはとみつをかくはをにくさめるれ清心給まくる

つきなしと打ほゝゑみ　花　ましからくといふ詞ハ花乃角
とかうさ色の事をはのといへるやうなまさしくまはり
ゐまゐらせてとにかくにあはぬるをかくもあり
てもうくおもひなると云詞出来也
あまりはくまぬ法のしきのいかひなきわれもまやあらん
気のうしもえんしかる給いは　細　葵上のはらからのを
やうのものをも源乃女くつる給ハゆへにさのミ
えむし給ハさる也　宋　源氏乃好色ハとくもし云給
おほよそひなるとそ也
心ろくしき法もれはまるやうに給へ物んほとをも
まあはいふをめつくしう義と云ひ出しる事ハう給ミ
物うくきこれもく程にもりしてさ夜くの法ほく
しにせさまてまつり給ふやうなるほどいとく法仏

のいと侍なくて　花　葵上のつきたる也　細　懐姫也
宋　葵上ハ源氏君より七八年まさりて法懐姫おはし
夜の上下替也ゆゑしう也ハつやうろのまやほん
と侍しこひ給つひし給ふも也法祈禱(キタウ)をもさせ
を給ふをも法くしかんとハいへり
おほしおこゝあるやうなるまゐれとしと云しおほゆるへし
細　法息院へのとゝえ侍る物也面白き様也　花　是ハ
物乃気の序(ジヨ)也　宋　葵上懐姫ハ法祈禱なとを葉源
のはいともまなる紀まへ宮をも下へとこゝろを給とのゝや
その法斎院ねりの給く君たち此女三宮の給ゐみかと床
いともとにと云ひ出し給ふることなれハ　河　清濃天皇弘仁元
年置(ヲク)斎院ヲ以皇女有智(ユウチ)内親王　母交野女王　為斎王
遠生(ヨモギウ)にも給ふかけひたりし故院とうきを給ぬを

ありし斎院の　花　と業平の斎院ハ下定ても
て後東河にのそミ給ふ法橋乃ろすたてまつるに初斎
院入給初斎院と八大内の中に大膳職或左近衛府を
点じてこれへうつる三年潔斎(サツサイ)乃ろすあるを
細　此斎院跡ともあまし自給にわたり給也居りて此三
宮と八弘徽殿大后此うち也　頭　花宴に法も此乃うち
ならし人すへし　栄　法性寺ニ一度立ちよりとも給ふ也朱
雀院乃法性寺ある所に下居(オリヰ)給ふ也
まゐらせ給ふによりておとろうかれと申と宮
たちもれけるへきおぼえまいらせしかなを　細　斎院に立給
るゝ神なるとにつきてものうきさましと也別にたち
給ひとちも花なきに立給也　栄　斎宮斎院に立給ふ
ハ人間もれ造ぬろすなれとすちものとハいへり

也別斎宮斎院ハ京の内ニ此立給也ましけれ
折うしまさねも王孫乃立給ふ中也と八云り
ほとのかむわさあれといつれもあるまつりの頃とを
きるなかる物語やもとにおほく見ゆるなれし
人くもみゆるを　河　神わさ(カミワサ) 日本紀神態
法様の日ニ上達部なとうるはしくまうでつる給
ひわさなれと　花　当年の四月ニ法性人参給りんとて祭
のまへニ吉日を撰(エラビ)て又法様のあり初紫野の野
宮ニ入給ふ也と二度の様と云ふ中の酉日賀茂社
へ参給て祭るにまてさふらひ給也毎年の法様を吟
午(ムマ)日見と修(シユ)するとも三宮ハ桐壺の法ん乃法様図
の後下定ふく初斎院へ入給へし初夜の禊乃るにも
此物語ニ見えし今此野ニいるを野宮へ入給りんと也

ての二度乃祓をもつて二段ハ初度の祓ニて勅史
参議一人侍まちて二度祓ニハ大納言中納言参議以下あまた
毎侍まちて毎年の祓ニても公卿一向に侍まさせぬ此
儀ニ云清書ハ六月より進ア数定里たるまねもあれ
ふちある紙まくまき給ひ延喜式ニ二度の祓乃勅使
ハ其大納言中納言各一人参議二人四位五位各四人
ましく十二人の勅使也是をもまいる時ハ以乃る源
氏の大臣ハ参議二人乃中ちる人へし是ともそられを
公卿ニ依まいハ乃る所二度乃祓須賀(スカト)ある紀物より河海
あると心もふ明ある人へしたるにもあらてうりしくまふる
也　細　清禊日とまで陰をト定して二度の祓あるを
是ハ守二度めの祓とかんしてまふるまてまかりし
筆　祓式の清三アラ(ミアレ)と云是也母神(ミアレカミ)毎年まこく祭ハ卯月

一　其酉日三まて中二日河原初の酉とも禊ハ毎年
如是卯日午日也河原ニ出給て禊し給ひ一条北
小路を東へとをり給也よ進ア数行にまゐるまの前
あり具(ツブサ)ニ注(チウス)之
始終ちをあらまちあるうちさまと　細　人を清選(セイセン)(エラビコトヽ)ちるもの
下(トカ)まねのとうちるうち海れまんとすてくるまてはうとく
のへらと　花　清禊日の勅使云々ハ近衛將来をとうへまるを
くら鞍(クラ)はるひハやまとくるを用香(キヤウコウ)義をはくるや
細　くやうのこれ乃日を清漆やうたくかゐてまかね
うゑのちう海をとふくにそめて用ちも
とふまりゑゐるやんしみて大将乃つるをはうまつり給
河　斎院御禊大納言宣(セン)旨所可(カフ)勤年中行事ニ云四月中午
日斎院禊る事と未日之例先二日斎院別当年辛陰

陽寮及供奉諸司不到河原臨時至地付蔵人奏
之畢日早且召王家及山城近江不國中路被院先
色被召御伴供山城近江給不參々日同聞之又依蔵
蔵人不信從昇役を被院　花　國史云貞觀二年四月
十二日丙辰賀茂齋内親王源鴨水修禊是日從入紫
野齋院勅大納言正三位兼行右近大將源朝臣定監禊
事一二三人齋院の修禊に大將供奉之例之　細　大將供奉を
為例初に見えたり　栄　大將供奉乃事ハ大切なる事なれ
とも女三宮御禊に御供なき也別當乃訛きりけ源
氏の大將を参議二人の中にてと日八供奉し給ふへし
うらてまうと物見車ハ持ひし申すと　栄　見物の用意すると
清く済ひたる様也
一条の物ほちならずて事くつききまつてさまで紀なると申その清さ

しき心くに立ちはしたりけるまつてひ人の袖ぐちさへいみしき
物見なり　栄　河原へ出給ふ日とかや
大殿ゆきの日やうの清めなりとて下をさくし給ふぬにはそてち
清ぐるやまし見れとも物ほしかもそうおもしろかりてやとのちと
ち歌すき曲ぐく見給ふてそたへありぬれ　大殿　細　葵上也
物ほしさ人なにたをもの物見にハ大将殿をとこそハ
物ほしき人　栄　大らとの人をえたとつかふ也
あやしき山賎さへ見奉らんとたすさまじくまうるとハ
めぐるとる出ようしはしく見るくるう観沙しんせぬぬとくると
おまりなとかと侍るう承とつかふと
又云度師銅乃又日本紀以人為身代と云不為質とあり　河　度子（カイラ）岩羅　日本紀 仁徳天皇巻
此哉も民代也さとへえいつかひるる紀下臈の人見かんと
ひをなにめむ也蟬をとせもともせひとともいふ也清少納言の枕

あまよみをこ云ひしらひてせいかるもあり 紀貫之白河太政
國存日齋序云 草枕ひしらふまて 松乃ふ年
ときむしの三種花乃はなくをとへ人のふとめにとこそあと
ちとらの河をひまよりきそてへくにおもん方なまうせなり
大宮さこうめしてはなちゆうかうきひかるありけるかる梅の
もはらくしきとなめりとて　大宮　細 箋にも母宮也
みえうに待車めくらし給ひて大將の車おはしまさんとすれ
時ふほかれ色里
白きを行て　細 みえかくれ給ふに見物の人も居完之
こしきとかはさせたまふをぬさ殿ぬくいてなにかはらせたまふ
さもちやうなめりに　箋 白きもさすうれ見えけるに出給
小積をとめり
ようやうしふをはしるて立ちまちまくる紀女房車。

物見くて　箋 奇特とのことそ
はらくれへるなれことと思ひはじめてみなさしのきさま
る中に　細 縫くるり
おしろのまうしなれあらうちてさもそれのはまるとうして
めるに　花 凡車ハ唐庇檳榔庇毛車あハみな檳榔を
もて葺く尼眉半蔀網代あるハみれはしろとよう待つさ
今は息風のはしらへいはまと云ふうし縹尼眉まハお
とものそこれ下もうれとうくあし給車みえ下もろう
もとをうきとひと以へとしも女房の乗用ものにハ八葉の車
みえ立て葉をうくるに給ましといはれすてとお遠
るうへしもとうなれるやハちともかうひあるといふ也
てうひきいりて　箋 車れたくにのうくる也
ほのミゆる袖くちとのもをそうはくちるとものさいとさまうし

あそこにはことにやつれたるをくひきいてみゆる車二はかり
河 汗衫カサミ　袙きぬのうへにきる物也　花 うへにきぬよ裳と
こそは下仕まてもきるなりさらには童女のうへにきる物也
弄 汗衫をはかひのすきたる人の装束なるとも
これもはかしにさやうよはしのきたるともへきは車みてある
をめてうちみるらくこゝ　細 御息所この人かは也
よそれさをは　弄 車をのりたる人はよそをあれさをぬと也
なかくなをわりてれ物さるなひきそれさうれそある物のさと
えもてゝめ法人もそ物ともなくしき　細 人々沈酔たる
有割心まうくりはるゝ也
法前の人々は　細 騎馬なとみく法修の人数へし
かくなるといへともくせんあるは　弄 さやうに斎宮そ心云也
斎宮の法たち安ちを示物わかしたるゝるすくさめまめや

也西てとみて御かなう前つとはま王のしはくまてとをのい
うちかくつてぬさもろるとみてくを　細 前つ地の法はまる書也
されいちとそ　弄 葵上法修の人わに何也
たる度とそうるをみてあひやすからんなるとつふと
花 豪奢也きんもんありとそるとし也
それはうの人をまもりまていいうともしとえんあるう
きそえしさるとされとももとせなてはえてぬうかとはゝる
ありみそうれる這読のさ海あるもくとさる物也
弄 御息所とむいきこの人なるへし
まうい きんとみつうしをれはえてはれかはくるつみに車
やとたてはゝをつれも　弄 さともにをまゝしきるとらひと
くれとともの心也
人ときまひのわくにをしやゝまて物とえれしは心やまし

きこゆ　河　人給　出車名也　清少納言枕草子云時々不
れは車の人たまひなとはまいりけるにて　花　出車
をも云事なる歟　さしまいて来る人ゝ召なとに人のまゝ
ひと名付也　枕草子云　あるもおほくゐなとさるにな
き所のは車人給ひ引はへさて物陰くきこゆると何
見にきしんとおしんと見る程は所もなくたちなるに
打つてきてなる車たちとたつのまへにの女房もちていそく
細　出車也　弄　主人のまちは従僕の人々に行ての車也
内の物見よりか侍やつれとそれときて立ぬるかいかにもくれ
ふれなるかまうとなし　細　は息所の心也　弄　それはいかよの御
やのは息所のんや又いとそれは中くのなりおとまなくや　私
あちちなともみなとしれてまて　河　昔は女房車ニを揚
（揚ト八車ニ上ルハレゴ也）
いとたて乗か作懐也　細　半なるともうしもる也　玉井一勘

女車みえ橋と申のなるとこころれかもとゝにくしんかまとめ
あまり見ん物みなを弦いたる也
もて強ある車のをうにうちもちまとれは　弄　不意也さよ
つまみとなりぬと云心也
又あるかへ見るくちゃうにはよきつてんと思つまうひとり
物とも見えてうるてんやし給へととをさいひそんひともあるそ
り　弄　さいとらひるかく人めもるかさきとの心也
あとあるかぬと人えも　細　さや河答なる也　弄　さやちや人は
出来ていふ也
さゝすらにはつきん人のは前かつまこのまゝ心はうりや
弄　源氏の待りをとさひ給は息所はれ給ふ心也
はのくまにさふおしねてうや待るまてゝさ給う
つきてをも中くは心はうしまり

河古 藻の下夜さはりまゝ河に詞をかへてしつゝ人のをとたのみせむ
花 うきを後見にもうけしきんとのへても藻ばかりまでにまかせる
詞をつれなくて歌と也下の御息所の身に影をのこし見ん
みたらし河のとある也 弄 御息所のうき後見のかり影もしるき
とあるを影後見にかけんとも物語さぬまやと思ふまし
て心はみたらし河也 源の何ともなく見やうき語ぐくともろつは
一 やり水河に同 細 やり水影をとさへに見んとも也
またつかはるゝとこれらそのへ寄る車やすゝの見れとしくみての
御こと申てる 宗 源の御心也又中の御後よりハ結縁と也
下をうれのすゑまでも出しぬりかゝるとほしたまひ
宗 寄よろ源の君をとめるに見ん語と也
あつとめみなくめ語とはり 細 源の心とめて見ん語ともとよ也
大殿のかしつきもとめたらてしる語 宗 葵上の御車

のこれを六條のかゝるにも忍べくは如何をとると御とや申さし
さりしやうされある心にまや
細 御とものへくうちうし込まりとんきへのつりてうつる儀
源乃御おん人葵上乃御前をも見れとして己寄る夜也
やよく御息所の口惜見ん語也
とし寄に影ありまてにしつまゝれなかりまつる 宗 御息所の出会
まれはしめまゝ也
河 影とのこをみたらし河の清れなる鏡に見ゆとぞいふしつゝそこ
乃森ル中にありと従さる小河也御手洗とも出て賀茂社末社所思
のあすにある河をもみたらし河とよめる事ある也松尾
社あるもみたらし河とよめる伝それハ賀茂一神乃
社同事様子ハ神乃御前あるたるもみたらしとも云也

兼盛哥はさもあるまじ何とよめる富士のねや

弄　清見潟乃源氏をいはのき歌へとも源氏は清見もたえぬ事

とよめるを　細　清見不乃清見也と白の桑ホ宴あり

宋　なふいりなりし川の清段に雜も源氏をとりまゐらせんた

めまめて結句車はしきたひのまゐまてうれ身

の隨とといとし給給とのん如へし

やちまされ吉はなてとくみるもとうしそさおされとめもはや

るる情はうてうちれはとうしうくそさへを見ん侍らしまり

ちや物語るほとくまつまて侍うそく人のあさ夜は也

色さくのくさるをと見ぬる中なをと　花　月もあやはさりし

こさ物の文をと見ぬるやうまるんや後拾遺後撰哥ネ葉を

婦とみ中とさてしうとめもおやまてそと我はあまりぬれ

此めとむあやはぬんとはやちまれんや和漢乃ちるまてと云

名それん書ん歌くへし

上達部ハいと忘とちまる紙　宋云心のかなや

色と源の清ひかりまにき方をとしきそれ定めり　宋　源氏乃清

事なとやしや

ちぬの清かりまの随身は殿上のそうまると此さるとハ常此

ことふとはしむしてめつてしさ行幸なるとのおまとれはとさちる

を　花　此まする一の雜役也随身すとも定とうしかうちんとき

の随身といふまで一員なも元はくるやもとその指監将曹府

生を一人つきりてそめふ絶へしとまてつまるなと云也

織ようまて随身を雜ふ為めてきりて出仕のさはひ

にようのはしめしさもうるや要みの時は随めく一人つめしを

そはをとりまの随身と云也假令納言の大将以下ハ左ハひ

まるとも右ハ左の番長一人近衛五人まてく六人の随身を

ゆるされてめしつかひたまふ也みかとにかへりたまふとの河ハ将監
将曹府生を又一人ぐしたまふと一負ともうしの随
身ともいふ也みずいじんもみな地下のものとも也
弄 ゐるとそめし花也と来将監将曹府生を一人つゝかたとよめ
しるしてはべるなりと云也一負ともいふ地下の者也
るゝ也　細　花鳥にまかるをかきくるふしとかくもとく
去徴へし　河　大将行禄剤之時一負府官侍奉する例
なり也かくのことの随身也まかるとかくの義也一負南日さかり
に随身に仕奉しあるへし也
まふて右近蔵人のそうはかうまつれりけしぬ法をいさめんと
ともかくもそうとてもゆくへくのかてよにまてうしは逢
行へるさま　河　去と蔵人のそう也ハ蔵人右近将監也一同
よ皆うえもさげてさらん行り左大臣府生ハ大将

ハ府のうちの中少将をは将監（判官）ハそう将曹ハさうかん
にあたる也六位の将監をも左右とれぞうと云也
花 蔵人のぞうとハ殿上の蔵人此将監をかぬるをいふそれを一負に
定まるまてハ御ゆるしなく也又行幸の時ハ左右大将に来将監
将曹ハ本陣に侍奉たまふによりてわうらし此一負に
めしつかはるゝをもちゐれをぬる也此一段乃詞ハ行ふべき
也別に能きゝてんへし　弄　此段ハ白楽天が諷諫の寓言といふ様と
ぬ行へし源氏大将とほめんとめぬ也ふ此詞を取へし
猶答之読　細　大将と蔵人のせうとハ一の蔵人左の萩の花下也
草木をとるを咎ぬハあるましきをたり　河　君子之徳風也小
人之徳草也草尚之風必偃 論語 訓若風行應如草靡 文選
はかなきくなきといふもとうしうくる女房のやしなへるや
又尾なとの世とそむきなるちなともそれまうひつけ給へ

に出たるをも見えてはれかちなりやあらぬかへしもみゆるに
河 清少納言枕草子云かんらうしたる物はかたはらやうなくした
る人のいてたちし時帝女並にさぬきとて中ゆひ
袴をそ云也云々 細 かんなの女房衣也 栄 つまの小袖なとを
きて中帯ゆるらかにしたるなとおそろしさなる事をと云
やかり
きぬはれとたるをにくちゝ袖をかきこしまきて 細 年よりたる女なと
の人なとに出る人よのはしりつきあけたる紙をさしこ
とりとかんしあるなり
かきこめある 細 これといつか装束なるなり 栄 口をとゆ
めて中のかんはとあるさまなり又うちきなとの小袖の中帯
にもいそかしあるていとかり
はやしのすみなとのてをはさみて立るいよあてつうかん事

ひとあまたあるとおもへはいとゞまかりしか事ある志河の都までとのゝか
はかなかんきなとをとゝ志ろくてたてゝ侍らんなとをとゝかゝとも見
い遣わりしき 河 大鏡(カヽミニ)云一条院春日行幸に法興寺大
家とこひのしき田舎世界の民百姓まて神仏のやう
に頒によはとはなをもて拝をまいらせしき 花 宋朝に司
馬相如と云し者は洛中に入し時色をとかんるもの
によを頒によりかくといふ通鑑といふ書に見えたり
弄 に紙合にあつむ所也 細 花なる司馬相如と記たり河
やまひとも司馬温公の事也 宋朝通鑑云司馬光赴闕(クヮツニ)
衛士(エイシ)ノ下加頒曰此司馬温公也
あをとこやられむそおんなとは 栄 さしてとあるを見る
のむすめとも源氏いめとみとめ給ましきにいる
をはうしたるさま也

心のうちをはかりしらぬ所　細　皆人はかくひそかなる也
車ともにのるさまなとたゝひんきなしなるなんめり
きやうくれん猶なりなる　孟　このさまはかりぬさま也とらへり
ましてたゝうしろにうちあひて思ひくらひ給ふハ人よりましの
数ならぬなりけなきに給ふとも思ひけるとなる　孟　是ハ源氏を
思ひし給ひくのるも宇治桃花おろかなるへし
式部卿宮はさしきちかくそかん給ふいとまたゆるして給ひ
給ひへのかちのむ　式部卿宮　花　槿乃姫君の父宮也
細
桃園也
神なるとはしめとそとめ給へと申しておほしけると
弄　おなし大きさに弘徽殿の女御乃の給しことを心にかけて
まはは源をはめてやうくに給ふ也　細　源をとらるにもと
ての給也まみちの女には弘徽殿乃御ハそねをまくなるらん

たゝ人との給也されとおもふかくかなかり　孟　式部卿宮乃心也
姫君ハ世をしらさるやうと給はんかたへの世人にもみぬとおもふかのめ
なくみえむとにはりましてうしろをみて世は心とゆり
あるをと　姫君　細　あさかほの姫君也
いとちかくてかくこむまてハ忍ひよりてすわりきこえてハさて
みてきこまてめてせよしはへり　細　貞女也なむしききこえたり
源の年来懸る世を給へしに姫君の心をとりはて
けるあるへし源の給ふ様のめてたさハうらしともいつ
てかまてかくれ給ふを人給ふへくなるものあるなるへしいかとも
ゆやうにかんてうちあるにハあるひきさきものとをきてして
源の大事を云也されともおもふく世にはおほされぬと也
まうつの日也　細　酉の日也
大殿ひとをのこ給はたし大将のさまハ　大殿　細　葵上也

宗、左大臣殿ハ葵乃上を不便に思給ふ也
かの御車ハ所せくてひとまの心ゆる人もなかれハ
細 源よろしくなりとの語也
いとくちをしうも思して　宗 御息所を源の思給ん也
すべておほかたにおもひたる人のよになさまをとられ
てもくるしさにつき給へるあまりにおほつかなけれハとも
おほしさためたるもうちとけたるさまをひとに見ゆる人さまのを
とおほしいてらるゝ御ことをきこえて陸ひとくはさくしまうら
ぬ人のせさせをさせるなかくむつかしき宮を示さんとさせれハとも
つらくもよしあるにておもひたるをも　舁 左大臣殿の歌
風との語つ　細 葵上ハ此事也心ありきたてまつらせく
名やうふそゝのましくさきとも絶とも御息所のあらり
へいちハくるしもあらりしかハ給へるをきこえて給へくを

陸くるしかりけるも出来ぬるも也　細 葵上の心ばかりとひ
なれハと思給也　宗 趣朔さへいとしきものありかくまつらく
みくるしきをかくれんとそゝろなるも御身ハこれほとまで
て御息所おもひけれとハいかにもめさればこそ源氏乃心か
りし給へなれハ御中よろしぬかなる人にされとも御中
のよろしからぬ事ゆへにそむくよしとも源はよそにあらぬ
むもも御身ハ様々なる事ふかくもぬとも也その御心ともを
はかなくもあらしぬ人にもちかつけて参てこの経るとそ
志賀しあるいそ源氏おほしめすほとに也
いふおほしうもしるまいとおもひそてきこて給へり
られと　河 塩(ウンス)老子 伊勢物語あそてある女の所りにな
つらきせ中を思ふうもして
斎宮乃御くたりの事もおほしやりてこの相乃事くらう

またとつまとて心やましくもえいめし給へれとものしたまへは
わかれかたし　河　もとの宮とハ卜宮也　河　六条御息所也
河花　さか木のさくらきハ神わさにつかはれたるゆへ也　花
本とハ賢木或坂樹とも日本紀にかきたり天照
太神あまのいはとをとちこもりし時八百万神達天香
山の坂樹をとりてそのまへにかけしより神の縁木
とし榊といふ字は作字といふ説　眼本と書之
花　延喜式云凡天皇即位者定伊勢太神宮斎王
簡内親王未嫁者卜之若無内親王者依世次卜女王卜之即遣勅使
於彼家告示事由神祇官一人率僚下随勅
使共向卜部解除神部以木綿著賢木立殿ノ四面
及内外ノ門と業始如　中宮ハ去年卜定有ていまた諸
司へ入給ハねはもとの宮にましくて神事し給ふといふ也　さ

かれはてたるやうなといふ也　細　もとの宮とハ卜宮を
て斎宮のはしめにいらせ給へき所をさたむるにていまさる
もとの六条京極の家におはしますと也　さか木の
たくひなき神わさにて対面ありしといへる果は縁の家
おはするを斎宮の給ふるに清浄の所なれは榊
をさしてめてたきとし榊をまつる人業内とか入也
のちとたまへり
あさかやうかさにうちとりかくしてわかれをなよりしきうち
はふやうにて給　細　只かく対面ありしとのへ源氏の心也
栄　御息所葵上の御中わろきとの給へり
まへに二条院まちかれ追わかれしてまかりにけるに給ふ西の
さまいまいまゝしき行て性も車の事あはれをしるといひ女房い
てさめつやとの給ふ姫君のいとうつくしきにはゝかりひたて

てらさるゝ代うちゐてみんまもり給ふこゝハ心え給へ
二条院　細　源也
まゐらせ給ひてしかんよりて清気ノ比ほどよりもときこしつるにみる
なるとうちさへて給ふひさしうそこさ給ふハさためるとにも思ふよ
こゝ日あらんかぎりて　弄 葵君と同車にて清涼殿せむと也
ちよのこゝろさだめして時うつるをなかしう給ひて清涼にとに
河
暦博士推古天皇十二年甲子正月戊午朔始用
暦　弄 時うつるとはかうくあひさうよ光女房とめし
出給ふ也女房ハ童女のうへ也前よ女房にてさうやとの給
と同しまや
まけ女房にてねとてこゝろのまとふことものおもひ給へる
と清らんもいと給ふこゝをあるうとかくと此すそ花やかに
うきつゝして　細 と日ハ源と女車にて出給へきとと也

うへはかまの色ゐしるく見えたるほとも声さへやうにかはれる
河 浮線綾の袴也うへはかまハ袴也其上に著るもあると
花
西宮云女親王對面時総角着汗衫半臂下襲
表袴玉帯赤文衵諸院の童女総角青麹塵汗
衫半臂下襲表袴白柳帯今案童女ハ晴の時ハ
打袴の上に表袴をきるうへはかまハ窠霰也
よのほとよりもうへの色のしるく見ゆるとて打袴とハかえる
まへのもしろく見ゆ也　一説
見のほとりハ我そくんとて　細 紫上のもとハ源のそひき給ふ也
うちて酔をうちもあるうれしくふかひやうんかもとくんとそ
きよらひ給ふいとゐるうれしくと思ひいゝそきもとうかへ
うちそはめるとむきにとられさるすちわろからんや
うちて酔をう　弄 おもふところとくしさ清らしと也

おもうかさけなるらんとてえらびそく手ひろとかさひ
中納言ともに納言はわれにかたらひきこえし也見えまゝ
栄 さてくともちなれはとちなる也ハおもひわれるにの給ふ也
ちかきとちかきに見給の座の見えるをさし此わひ給ふ京ハ京都のこなたへむ
と中納言給ハ 河 髪そきの日を見よ海松の巳也
のつくしまつけんとつきたるにや 細 ほそ也河海説 花 うかれ十人云かと
さしと侍べし 栄 源氏の御身也我のこそ見えんとハ源の
髪ものに給しつらん也ちかくをとるとしいへまでもおもひ
たち給ひものにたちらんし給らんといへる也
みるとこそいてらんしあれにみちひる也かにのこと〳〵ぬよ
花 源氏のその給といふてひ給ふつきて定めるにいふもみち
知る塩をそこらの君の海も定めてと綾給へらい
何しかたくさ也らん也し 細 みちひる塩とハ源の心の思ふ

めるすれとよめり 栄 上やうくおと給ふらん也
也物よりさはきそておりたる待かく給ふくしき物かは
うわるしきをめてたしとおほえ 給ふらしきを
栄 よろしきは徳也
よそをともちなくまちにまちと 細 よそをも物見車ぞ物は
さしあり
むかへの物とくれはとにかくてよろひてよ達ア此車也
とおほくこ物さそろしきたるかやるとられとやをくらひ給よ
わうきさ女車のいろの見えられぬるもあつきとさ
しかくへ々もまねきよりそてちすやハたてを給たぬ而より
やんやむとなるといわれる御物なくらんとおほされて而
とをとにいれかたりされいもさらうをさせ給て むかへの物とく
河 左近馬場宿屋也 左近馬場ハ一条西洞院にある馬場

ハ一条大宮也　花　おとゝ也とハ后腹にてたゝ人の高き場よ
ありし月乃頃の御中がね花産する所也　然ば太政大
内の御ちかく小陣とて一条をさまへこえるにより左大臣の
大殿乃福をわするゝ也　細　一条也　宋　播員を批判する所也とせ
ゆそてゝ語つるところの心を役さしにあとの語へも
細　源乃五位答也　宋　内侍のかみに源の乃語ハ弐立月なる中
に是福まゐてより紀所をとゝ語つるハ祢宜さとの語ん物へし
よしある扇乃はしをとおりて　河　金一扇也　弁　名と付る
也　細　移扇のはしと打ちるつや　宋　名を扇によりて
扇ニ名とて色たゝぬへし
あされやくのうさをるゝ小ひゆへ神乃ゆるしの宮ゆ銭まちける
細　葵ハあふひと云心也　ゆふへ人とよめる神のゆるしれぬ小銭
語あるもゝハ人と日乃葵のかよるとゝて語しつるにん

と同車し給ふ人もひろし也
典侍のうち思ひとあるより心をかけし心なくこの内侍乃老也
のありさまをいふさまなり　典侍なら　河　古今私羽意可
細　勤　花　典侍かと云るはあれハ典侍乃うちとゞめへき也
引き来勤へきある事にても侍るよし也　宋　典侍の
ちかきあるはすの神楽ゐにかたらせて典侍内外といふよ
るあれハ我ハ内侍へハ先にひるまゐりにとゞかゝらす絹奴へし
あうかくと言ふ海めくられとみてさに　宋　内侍ハ老女なる故に
かひの語くるしく見てあらしき海とみてきと也
うきしあるへそあるにも見ゆるやそらちへまるへてあふひ
と　河　八十氏とハ人の氏性の数をいへるなりあれかち八十まりきるへ
うしもと八十宇治の数のうきるなり百姓ともいふ也八十宇和語数の
多也八十嶋とも八百日ゆくともこのうみ多みなん也

花 後撰集四賀茂祭の日物見侍る女の車にいひ入て侍
ける ゆきかへる八十氏人の玉かつらかけてそたのむあふひ
てふ名を 此 神まつるひにあふひをさしてかさしたる人の
あふひてふ名をもみなさしかさせし 弄 源内侍はあふひの語
しるしと語り八十氏人はむかしはゆるされしはあふひたる人
ととよみし也 細 源の一首はかさしをくやしきとなり也
八十氏人とも物ほしくれ人はまるむひさやもとむる物とと也
語句のあふひ葵とよむ也へしあふひとハよむへし
あふハ古き物名に葵とよくしてはあふひのままにうくして
よめると葵と心にあてよむ時逢日とよめる物の名
にまとめる物曲とよくあるへし 栄 源氏の返哥
源内侍と葵にてそへてよめる内侍ハ好色の人を知て
かさしてあひをあひみるによし八十氏人とハ諸人の心也

あなにくしやとうちいひかけたり 細 源のおもてみえくとの語なりや
くやしくもかさしける哉名のみして人たのめなる草葉はかりを
花 あふひハ人の逢事を草葉にたとへたるなるへし 細 源内侍の事也
栄 はかなしとハ草葉のかくまいらせ給て逢中とくやしく
とかさしけるよといへりあふひといふ名まてへのたのみさ
草葉と云ハ葵の事也あるをいひてるにくくつるまや
此時の人々とあふひのりまてもうされとそたにあまし給ぬとよみ
やましうらかくんちほかり 花 栄花物語云陽明宮和泉式部
此宮と同車にて祭見給式部かまれ簾打かけて袴
の紙乃物忌と付たりと葉葉花にかるは葵の葉と
ハ女ぞる故へしてれハ車の中に九丁れ帳をたてたにつ
てくるまうくたるや 栄 其葵と同車なるへし
一日の清き事乃うとうしくちらしにまへすとうちみちれ事

わりさ給ひてまれなる人の中にあまぬ人もしらんは口をしくや
むすとしもろとゆへ也　細　是は世界の人の思也源内侍にはあら
ず　孟　源氏のうちとけ給ふをみて給ふ時のことをいふ源
内侍がいふ詞なるべし
いとまちしぬるかしあらそひけれと　細　源のことも
孟　源内侍と葵のうへしあらそひは面白きと扇をさぬるとも
心うくしく扇をやるかりいと思ひしぬ人かさあはひの事
給へるにはまちそてたれさはうく人と心中とくりけん
とはそゆへし　弄　此段はさうくしうし心とはくべし
さあしぬ人とてさあひ葵給はそくうちて車をと
ゆりしあるとや　細　源の心也源内侍はおもとる人也か
様の思ひすみれ人あしきては源の人と同車し給と位
あらしは中にて給ふまとも有まじきやりし御心うべきを

は扇をとく是と思ふありけるや　私　源内侍の扇のうちの書を
しらるともろうきしむあしぬ給ひてひとこ給へは内
侍あかしぬ人かなと又るをとはうりし給へと思よて同車
し給へるにまつもくうちをもまる心に人と中すぬ
とやされて思ひあらしぬとて内侍と打まかれ人まし
てさやうあしぬ人とも紀也此段諸河錦縁のうしわく
たり事は一字のおか也　孟　此段古とま事と云あなる事
内示といへり源内侍は思ひては事るれ人やさやうると
あれ人あらうて源氏よりこと年ふるとはうらひ人かれと
と中也内侍と思よあひのうち給へとしつうらるそはつて
面白と中すぬうやえなるべし
宮もと源ハ物と扇しみるる車やしとろまのとと扇に
うひすまも　細　是まるとおそ条さみを示をといふ

ふりすてゝはいひすてゝ行へとも今はとてあかされまし
抄 源氏の御事を宮をふりすてひ路ん也
ふるさと路なんいふと心得ぬへくよそその人さへうと
抄 斎宮をつれやさまて伊勢へ下給ふ人さへうとのなり也
我まゝ人をもすてゝ
人よく人まゐらんなりや御用をきさとて立ちとあらん
をかりかしるなにて 抄 源氏のをもとうくやとふられ行なん
よとせ中ゐんのうちをも御用いゝまても心也
かくふられさけなにへともひゝてもひへうかちもやまとらしもて
河 思ひ下也 抄 御息所をとふいゝ源よあけらぬ紙くちかり
よ思ひ合紛也
ゆふをする所にゐつをすまやなうはへし御用しまて跡をすや
河 古 伊勢の海又伊勢かまるゆへ氏をむれやくはしとゆくさはかねる

涙子御ちられたに様なるとつきられてつまはこけこと
ちてもして奥のくらいやとくするや 花 宮をも不伊勢
へくるまや立れましふゝ云かへし給ふ事よ御する所との
うきとなれやとなるたるとみてそ面白し心ひとへをも
行かぬ心也源氏の君とうらみある様子とあるときのこと
きれやうなる事へし文下の詞よりうたたる源氏とあつみゐ
一首の字よくきれたる詞也 細 引歌ふくられつゝ伊勢下向
乃ゐけんもしけりけるゆゑの路なし也
源氏をもうつれあるやうに御ぼえされてをりやましき路
抄 りもさしもむれ序乃詞也
大将殿今もはゝる路らん事をまてもあれはてあるまし
きゝけることゝきゝこゝそ路のは 抄 源氏の御息所の
御下とゝけしもきゝて行くさゝを路のは

ぞく源氏の殿おはしまさぬとなげかんしらでてよその給よ
御息所乃宮にて思案し給ふ也
殿おはしまさぬ事をかへすがへすも思ひ給へても心とりまゐらせ也
今はまことにおもひなれても御心ざしもそんやはさのみぬ
みちのくにはなしと聞こし召ひ給へて　細　源氏より御息
所へは言候乃詞也　細　源よりの詞也
はじめよりの給ふる　細　さてとはりはるあるまじければ也
にくもやすくはなむと立出給へる　抄　今日は物ぢかんなる也
みちのくにのあしからしやにいとまけにいとうく花ひし
いれるを　花　車はしらひ乃日のなる也　抄　其日の日は息不
の御車にあしく面しくたるとなるにいとつらく花さ色
大原みやの御社のまとめきてはなしつきひ給へて様もくお
同じおけくに　抄　葵上のは事也　東をたのいきとお乃

ちうしめなるへし
まありさちるを御心ありけるはおほかれと二条院をとと心くそてる
まり給ふ　はありき　抄　源乃はなる也
花　さもつてと皆むとおる給ふ八おもとにおひおもし給へる今の
くにつきはらくにかえなる花はんのやまぬ御心くせとも心
御る詞よつくれるやさきもはへとも葵上とかくさまうや
むしとたちすにおひ給ふと思也　細　本文注給んしらる
らさうしはもとのくにまへ八おもとにおものし給ふ也
みつしまらの御へ　細　懐姫也
そひ給へるはちやまちもれは心くるしうおほしあけまさてはもと
はやなうかやなると現御くうくおほくれてなきも給ふ
抄　源氏の御くらさかくは行幸はき給ふ也

物のきこえもむつかしきといふは物怪といへるにて 河 遊仙窟云
窮思故調人頻日魂与夢通といへり 弄 生霊也といふへし
是乃ことをも 細 ものゝきこえもむつかしきといふへし
さまぐのおほせごとある中に 箋 よろづの事にもとりてそのさはり
人のことにもあはれなるにはあらずなどとのたまひた
るほどなるべく 花 是へ宮も御の生霊也といへりまま
とかくいぬともおもひもしらぬかなしみにたへさる
さまをいひさるやうにみつきいたくのあはれなる
よろづの悪霊ともあり給へるも
あとにかくもいふかたの中にもあるなどもおもきれと又
人ことにもれなくおほしたる此物の一つありけむといふ
さまざまおもしとさまかはる物のこころもあるをおもひわたりそを
のよそにきこゆるものゝ是の侍るらむと申らしう

事也御息所の御事にて 箋 御物気も甚くおこりて又屋にて
さうしのく物なるなどといふ也
此宮も二条院の東にちかきところなりてはさはしちかく此夜
みそかにおはしましてさはかしきほどの夜もあらはなれば
御めきてまのありともこそと御人と御して中なしはつるす
ともあしまのくまをとてもわさや中に物のをこもときこゆる
ともあし 弄 始也 細 葉上もおきさかなれほどとと人まさち
らそひのくさうちの中也
名みなかき御子のとこにも人まいしに 細 自然葵上の御めのとの
うちにうしむかるをとはるちてまうしかたる霊をやる
やうこそ 箋 葵上の御めのとなるをまやまた源氏の御方と
大殿なるをもあまりすみや
おやの御かたにつきいはされるをたる物のよきめみいでき

かくらなるを　弄　光も葵上れ御かたにつきたる物のけにや
むかへしかともさそこそおもひもあつかはれ　弄　御しあつかはれて
さされとさて見えぬとのことや
さて法くら〳〵の御修法のことゝもありて　細　物のけ称也
物の〳〵ハむねとせ礼何をたてゝいかにもおもへにくき
かさなるゆへしか御ふ御心はくさみつとゆふしなされしく
物のけあまたなり　弄　いちもちの物あらはれハかくれなきや
院よりもたえす御とふらひ法ハのりけしとおもてもかしをおもおもの
ちらせ給さまのこゝろつきとまるにつけても心よりしもとまり
おほくの御かたちさかりなる御ふしハにくみとしたまひつゝ
みとも　院ハ　細　桐壺のみかとなり
宮の御とまりたまひて御かたち思はなるゝにつけてもゆく
まへし法ハとも心ゆたかにそおもひよりて車のうちにはかなし

心のうちはまろうなる紙　細　霊すまさる心おもしろけるを
この度は御ゆゑにてもかゝりし事の御物ゝけ御はかならぬ法の物とも
めざましれ　細　人のうしむへきならぬを祈りしたまへき
あり助して給ひのくはハ不消なりしいれしさおほつかなと
おとしうる物むつかしやもの心ならぬをとはむさと情もの思ふもの也
弄　葵上れたるなるや
御心ちハ猶さらにかきものにおはしけれハ御かたらひの仰せにて法
もよろしまさぬせさせ給ひ　河　大将すみつゝ御物のけ御よろしき
てかみにくき修法をおこなはれける也
それにてもさらにまたなひとそ弄しての宮ハ御ものゝけのあやしき　花　光ハ御息所
わりなきおほかたのうへにありて法行なひし給ふ也
細
御息所也袖なるをはなれて絶ゆへきつりて修法はなる
し給ふ也

大将殿聞給てみつれるはたゝちにとりといとほしう思しけれ
とてもかゝる事ありけるはいとほしきぬ様の事ありけれともいかゝ思ひ給ん
よろつおもふ事とてもなきを御はしゆかしきまゝぬ御心くまなくて
御心なく　宗　源氏の御息所の御事なとやうにわたらせ給となり
なをやさしき人の御事をなと御心とゝまりけんとおもふ給　細　葵上の事也
宗　苦しき中にて六条御息所の御心をいとほしく思ひ給ふ事をもいとゝ新給ひぬとも也
まつりの日はちかひつまつりてねたきやうにおもほえけるとこゝろう
思ひしつむる心にもあらてさまにつけておもひ給へとなんすくさむとて
らん　細　源の詞也なんせすさむとてなんといひそてるを
よろしく心得へし
よろつを思しのとめたる御心もいとられしうらん
何とかたしひをたし給はぬよりもんみちしをもたる御心とゝき
をむとりたのられはけんたしも給　宗　源氏被車事

みひの方へもうちつれてあまりを見えるはみん〳〵あれと
うしろをはゝくしてゐるかた給也
うちへまぬかれ給へるを心ち出給ふ所をさは大殿の御めしさせも
花　御息所よりまへは給給也　細　宮もとみよりまゐり出給給也
宗　この宮とみの心也
給ひけるをみせ奉んとておほしける人の御ゆかしけなる　細　宮とみの心
御心とゝめたまへにいとゝ心にくゝおほしたる人とも心ちてはみに
されたまひをもみに思はし給ひけるを給ふなんとかやうに給せて
は何らんとも御心はさまかへるを申しく物思ひの御ところおき
を心ちし給ふに　細　葵上懐姙事也
出来給ふなにかにつけても物思ひつきぬ事なく　宗　葵上に給へる
の御心とつれなく給ふりんも御んも御ときまの御心も
よろしかるへきなんとも也

御文ばかりぞ暮つかたある　細　源氏もまうち給はぬとや
日ごろすこしおこたるさまなりつる心地のにはかにいといたう
わづらはしく侍る故えひきよかでなむとあるを　細　文の詞也　葵
上の物語なり也　花　後朝の文葵上乃方よりかへりて書きて
御なるへし
例のことつけと見給ふものから　細　例式のことつけ事也
と給也　弄　御息所の心也
袖ぬるゝこひぢとかつはしりながらおりたつ田子のみづからぞうき
花　こひちハ泥といふ也恋ちにかけたる詞也深く袖ぬるゝ其
をり田子とハいやしき人也田子ハ農夫也とてゞ泥中にお
りたつ物也宮すん所の身なから思ひよりて給也　弄　此哥ハ
心あるこそ哀なれ　細　御息所の哥此物語中一乃哥
ときこえたる也　弄　いやしき田子の

みづからとうへ御身をあまたとて嫗のかきさまも
ありくくち袖ぬるゝと云は源氏をとふ給へは袖のぬるゝ事をも云
つとまちいふうへにひやを給ハぬハうらみのつはれゆへ也
山の井の水もことわりにとある　花　山の井のは
浅き契ぞといへる也　源の返しのおもむきいひとをる
なり也宮すん所の述懐し給也
河　くやしくぞ汲そめてける浅けれは袖のみぬるゝ山の井の水
細　くやしくそ汲そめてあるん者とき浅き契也
深からぬ御ことにて源氏の人の中にはとりわき思ひ給つるを見給ひて
細　浅くもてなし給へるをいふ也　弄　御息所の心中に
深からぬ御ことになむとも
いふかひなきものゝおもひてもちかくにさう〔?〕へ給ふとも
くえ〔?〕ひてさも人〔?〕さもあるまじきまをとゝ思ひ給へる事

くらうあつたふれと　弄　源氏の心中やる感也
細　うやうにいはくもてうしひきる人乃心さそうち添へき所乃
あはれ人と也とたくま世中ありと也　孫　是ハの源乃説ん
や　栄　ほくいはれる世みちくハあろうや心形らうく
まさに物とおもふきぬ人のあまりもに物くしとかくかそ
ろうさ源とに道をそと也宮のは源乃心くるし事と也
紫のとぬるやいふかれらぬ深かくにあん　河　いにしへ也
細　山乃井にの心をある詞よりもそうせ山けるあと見えてハ
伊勢物語まこのとうきもとうとあへは志とくに好まそ
あるといふやうにてもいひ入れとる也　孫　源そうと又詞
はさまくあるらすやとの給也
浅きまやくへてあはさつけやさハあもうかりまて深きちらを
花　源氏の在るや深くる田多くハ浅中にあさきに物かた

つまのや方もろうかりまてハ山田に深きのそとぬる心よよめる
是ハ方も詞されとに浅ちからまとゆう心詞さひ
あそく物語と符り　細　源のあ也賢き氏うと也方もそ
う河花る説いて　孫　深自ら所をあさくにおうもち給
源とに紫ぬるくうと也宮内なつれ浅ちまあさき
源とま方もうかいうと也
打かうろもそくやこれ深あつとくつ中のしきもぬもとあり
太政大臣も浅猶乃きいうくわくうしまうくひ給
弄　方つくる事りて深あとともとさぬことはくうと給と
たとおかうもあし深さうるそれおりかくあまれそと也
細　大かたのふは也お出て事りてあかへきと給もあるそうふる
葵上乃よくく物語源とをと雅意あへきうるまと也
この深いきをちうちそこもう物と此深らくるやとかかもあるや

とかの給はつきて　河　大臣の父大臣なるへし　花　父大臣は御息
所の父君の死霊とぞいふ也　弄　六條御息所の御霊なり又御息
所の父大臣の御霊なりなとさまさまいふ也　細　河海は諸説
みなとり用ゐたり只具平親王の孫関白霊なりとかける事
栄花物語にあり
物のけいてきたれと　花　是は宮たち御かたの事といへる也
細　さまやうにいへることある也
あひとつのかたにしたかふ事よりはことに人とおもはれぬることなる也
とかきれと物思ひたたるへき事しもさまやうしむ也
おほしたるまゝに弄説にいはくひのこほれる也
まくしつれと　細　宮も御物のけなりけり也
かくしもくたけぬを　孟　弄説もおほくいひたてく
人にいはれとも是程まていひいてきれぬ事也

きたれさまれおもはぬ人のいひおとしなき物にもてなさる
ぬるをりしみそきの後ひとふしにおほしうかれにし
心しつまりかたうおほさるるけにやすこしうちまとろ
みたまふ　細　孟　車あらそひの時の事也
まとろみ給ふ夢にはかの姫君とおほしき
人のいときよらにてある所にゆきてとかくひきまさ
くりうつつにもにすと　細　宮も御物のけとおほしめすやう
のさまとも見ゆる也姫君は葵上也　孟　葵上をと御息所の
もてなやみ給ふさまとおほしなけきたる也
たけくいかきひたふる心いてきてうちかなくるなとみゆる
とたひかさなりにけり　河　猛辛[タケクイカキ]也いかきも也　ひさする
心とはやうといふ事はてなる語也　私　おそろしき語也
細　辛[カライ]也いかめしきさまなる也　孟　見ゆれる語也

あかぬ心しやまにまとひてやいかんと　河　古　あかとすへし
いつやまかなかんとおもふとかなる物ハ紅也葉り　弄細　别ハ同
かく心なしもて物語し侍りしをあはれハ侍かぬるすきとにも
のこるなからましよき後のるをとしともひそ哀世なれハまして
これもいとよくいひなしつ色紅をよろしもあらしと物語をに
河　現心（ウツシ心）　万　現人（ウツシヒト）　日本紀　梅花本はうらひらくひをれ
うつしんとも家ゆるまもるくに
いとあさしう　花　ゆかふかきいへさるる也　細　ゆのさる也
孔　名をうちうましきる也
紀さましく世ふかくありてのちにたくきのこひハよのは如学
あらそまてふ人のう色まてに　細　死霊ハはかのこす也
はと海うゆしき紙うてのかあるをまたるうきまし
きるかとひはゆをらてきくせのう紀なす

栄　おきまし色いまくしきと也
もゆそてはまるる死人をひそて思ひうきはかなしや物語し
人をとや　細　源也　栄　源氏をん紙ともきしとひく侍と也
たりうるも物をあまり　河　思ひしとひすも物ともまあり
あまりしとなくにあまりやあきて奥入伊勢紀　弄細　别ハ同
栄　源氏をといしともそれとひとひさるへきいふ也まきとさま
あのん紙のもとり
斎宮ハこそうちにいるまし行へまりしともかくさけるまとき
てこの秋いり給　河　うちまの給ハ久鉾司给る也九月神宮
祭礼月也延喜式云九斎王入大神宮之時自九月一
日至自とこし　花　内裏より九月の御はらさいの給へ
きう紙也　弄　細　いまさいか宮をまします也鉾司と
給ひくる也　栄　伊勢女紀もみ云給ひとこし東内親王と

まつたく王孫の内親王となし斎王と申也伊勢大神宮御杖代
なくも斎宮に内親王ゐ給ふ時は卜部中臣大神宮主を司
とる也是を卜定と申也精進潔斎あれど去
るも也又精進の後宮内にして一年於大内諸司一年
是と右源の司と云也於野宮一年三年めに斎宮
に立給ふ也又九月にまつり給ふ也
九月になりやうて野宮にうつらひ給ふべけれど　和　伊勢の斎
宮の野と宮は嵯峨の西桂川にあり賀茂の斎院の野
宮は紫野にあるべきにて野宮と云は伊勢の斎宮なる也
すさひの法ぜう人のうちにとをきらぬべくさたまりけり
やしう　花　斎宮諸司に入給ふとて又野宮に入給ふんと
とても東川にて御禊あるべきと二度の御禊あるべし
云なり例の時の御禊は西川にてあるべき也　細　聖文

一入ぬ海にも出發の御禊あるべき也花鳥にみえたりと
箋　諸司に入給時と野宮へ移給時は東河にて御禊あり
賀茂河のうへ也是を二度の御禊と云也伊勢へ群
行の時も西河にての也是は桂川のうへ也此斎宮は於
本宅精進二年也見えしさりしもそうらふの給へ
なりしとさ海くさうてうけあつまりて此秋入給とはさいふれ
諸司にて御精進は此度は式なりしとも也未及
は諸司の精進を見るも本宅にて二年さを給ふは此也
以上一年此精進の間は不見へし花宴より見えし
まだ見ゆる也
ほとくしうてはくくもあまりやと給ふやうにと云や人の見る
まつりにく法のうちとさ海くつうけまつる　箋　清見不足
いかくさる斎宮やつらく御覧じてと来るなど云り

おほかたにしもさはみえかくもさりことゝもあらくて侍れと
もてなし給大将殿とはとおもひまし給へと
宋 いかには思ふ成給ほとよ事も始給也
ましかるそれにまつるひ給へも御心のいとゝ人あまたあ
細 葵上也 宋 葵上本妻なれは又其御物怪かなへる也
又は人さほとふもはかすみ給へともかくたりの御所に儀よ
はなしきさみてるやう給へいとしき心のわれ数とつく
してさせ給へれと是人の若う物と御物のきとひとつけ給に
うらは屈んともなれおんさともあつさるかたもまてあ
やむにもさうに心かしら 又さる人さ 細 御産のさや
宋 葵上の御産もさらしきを神方ゆ給へんとなくに
ましきをつき給とや
てうせしまそてもうしきにあなれはひく 宋 給でありてや

もてなしゆる人給へや 宋 うちいの事とちかくめ給へと云也
ゆゝしといふ也奴へし
大将は常にゆく人さまのおもとの給 細 葵上の源氏に物との給也
されとよそにやうかへんとてもの給はぬ様のまとにつまをよ
そなた 宋 前には源氏と葵上と御中よからぬやうに事
しうねきやうふもあられそそ人々の中さ後や事とやう
はらんとは屈に御まいてそ也云んや
むなしくなるとはちかしに物し給と申すを後はしさまを
おほはれるやむやて 細 まさ云もあるへきかとそ也
おほくこも宮ともをしきこえいる給かうちに修となし一品ま
めて 細 宮は母宮也
法花経をよみたるかたへらしうよしえ九十此うらなひてもむき
あまたくわんまうち給へもいとたかくさまつくは中にうらなしあり

さうして御つくろふ波ようもくへさせにかんきんよみもんとさせ
きぬを一つましてかしこまりしたもおほしめしまとまとおり
法花経　河　敏達天皇六年本朝羅什三蔵訳又云推
古天皇御時聖徳太子逆持法花経本遣渡小野妹
子　哢　色とひきくしとこそあるなり
おろかなる法ちにかかるあひつとそれやうふくく清き也ひつとか
かうおもひなりとちきさゆるひくおもひ人々ならると
細　産婦のいてふちや　哢　病人の攘施へし
さうてとそらいうまきにあまためたまるかくろうひくおもし
かまたれとかんむ御ててととくへくあらぬ心あへしかひにめぬかん
せ給ふれとそて色物をとらん出て御つきなきさ御へきまへ喜ひと
まつらかうまつしまするる清まうこと　細　葵上の氏くらま
ともとなる物施とへもし給ふくかん経也

いとさゆゆるしにこゝろをもちてうちまきまつるゝ出たまひ給ふり
哢　法の人法月をかんあまき経へ清りしと也
波のこゑかくさ波をかん経へゆくあかれぬなきさうらん
弄　葵上は霊にかられて源をうちまかせ波をとおほ
あり　細　弄にかなし
おまりゆかるうあつき御へきし　細　葵上也
心うかりたおもやたちれ法まうすをおほし　細　源の心也
又うくみんなよつきて　細　源をかん経よつきらく也
くちわしうおほし経すやとおほして　哢　源の心也あまた
別と出しこ経くまる紀経ひとも也
あまふるもいとうあおほしけれそ　細　源の詞也後世まよ
てとも丈婦此尼ハさとしましきさ也
ちうとともきしうハおもしきし　哢　たまいへさとましきとも

まろかありともかくもなり給はゝとおほすなれともいかなりとも
なん　花　来世まて夫婦ハゆかしめなとおもふならむといへり
哢　さまとひとつ語也語とも夫婦ハ来世まてもあふへきあ
ふと云なれハ対面ハあらんなりや
切とく宮なとも深き契ある中ハめくりても絶さなれ
ハあひみるほとありなんとおほせとてなくさめ給也　細　親子の
契ハ一世といひかたけれはともいひかけてなくさめての給也
いてあらすや身のうへのいとくるしきを　細　葵上の詞也
宮すところの霊乃入かはりていふ也　哢　生霊乃詞也何やさ
やうのをはしきそふ也
しはしやすめ給へと聞えんとてなんかくまいりこんとも又
おもはぬを　哢　かちよせよおつかたしきさみとも也
物おもふ人のたましゐはけにあくかるゝ物になんありけるとな

つかしけにいひて
河　後拾　物思へは沢の蛍もわか身よりあくかれ出る玉かとそみる　和泉式部
なけきわひ空にみたるゝわか玉をむすひとゝめよしたかひの妻
河　思ひあまり出にし玉のあるならん夜深く見えは玉むすひせよ　古今大臣頼文亭
玉ハ見つぬしハたれとも知らねともむすひとゝめつしたかひの妻
細　玉の出ぬる我をむすひとゝむるすかたあれとやむすひとゝめよ
といふらんとおもふなり詞つゝける心也
哢　宮すところの霊乃哥也
のたまふけはひその人にもあらすかはり給へりいとあやしと
とおほしめくらすにたゝかの宮すところなりけりあさましう
人のとかくいふをよからぬものともの云出ることと
きゝにくゝおほしてのたまひけつを目にみすみす世にはかゝることこそ
ありけれとうとましうなりぬあな心うとおほされてしめ給

色せられとてそこしぬるうたの跡へとのこさま入たまふ
それなるは花さく梅はあるさまのつくるまりんくち
うつりつるもかくうつくしさ物思ひぬるまことに浅き春のまう
跡へれも　宗　それなる詞とはり　宗　此見下の詞なり
さして見へし跡とも
紀のおもひふりやとて　宗　病者の心乃ひゝきや
宮の詞ゆゑてよもや跡へるにわ花おとこさ連歌く侍とあはせ
連歌ぬうまうし也物思ひきるゝのうちをもちまねば　花　栄花物語
又一条院の母東三条院よわり連歌へなるまと心ろるにハ
とく行わりいしも行て侍る詞ゆゑとにまふうぬめさ給を
あき詞もとハ思ひ出也や　むかし連歌ぬ　細　ゑ宮の誕生也
人はうつまうつ行くる詞物のまをも神さうるとまぬとすまやうひ
いと物さまりうて　宗　物の気とうるをましにわつきとを

体り生れ行と申るく神さまつるなりや也
後のるするさいと心ちともすくいふさうなる紀殊とるたて
さも跡ふきをすや宗いふるにるるなりちそてぬれハ
細　産後のるすや　宗　後の物乃う文
山の府るあるにくま乃産んとある紀德ともさてあるほどにあせ
ゝすのこひつくいへきとまうそてぬ物思ほく此人のうけ侍るしつる日
ばうのあ跡もそうてうちやもさへてとハ詞りをも也物思ひを法性
法あるとハ文をしめうんさも跡りく　河　義玄和尚天長元年
六月廿二日始補天台座主　号修禅大師
まりをけうあるとめてしきさ法りしつきにみ家人ゆるうり
德とをしめまりて見てたちら上生アの方とまなすと
細　誕生乃真ありめてうきに法人ふ紙りれ行ぬへし
宗　とゝる此事にあるとて

うへ宮もひとつのめつらかにいかめしきを夜ことに見のゝし
る 弄 三ヶ夜五ヶ夜あるとかくする也 接 左傳哀二
細 三ヶ夜五ヶ夜七ヶ夜なとのあるなるへし 礼記内則篇云国君
世子生告于君接以大牢接讀為捷々勝也謂食其母
使補虚強氣也 又左傳桓公六年傳曰九月丁卯子同
生以太子生之礼挙之接以大牢 弄事ニ同
かしこにハいかなる人おもほえはそれほとのさわきあらさりつゝし
さめてたゝしの宮をいかにと御心をさまとさまにおもほえしたる
かくうれしきにつけてもあやしくわすれしと 細 さてうかく思へり
やまひのゆへにつきてはおもひしやうに
さそかしこにもおもほえなくおもひあやしうちはしめし
らぬ御心ちをおほしつゝくるに 細 此なるは宮す所ゝ
ゆめにはなをいかにも御ぬれいとゝあさましくおほしたるに同

御そなとももいかなりもゆる香にしみかへりけるをあやしさに
河 邪気行法之時護摩に芥子を焼ゆへあり 是も邪
気なれは 細 邪気の護摩にハ芥子を焼也 それも清息法
の故なとするなり 弄 護摩に焼之芥子を焼とはいへり也
列五穀を焼ものも
御ゆするまいり御そきかへなとしてこゝろみ給へと猶おなし
やうにのみあれはわか身なからたにうとましうおほさるゝ
にましてひとのいひおもはむことなと人にのたまふへき
ことならねは心ひとつにおほしなけくに 河 鬱
ありぬるなり也 流落事也 史記に沈とよめり
細 鬱陶しき也
いとゝ御心かはりもまさりゆく 大殿にハ心ちすこしのとめ給
細 大臣の御心ちよろしきなり 弄 源氏をいふなり

や　宗　いかにも生きたる人のやうなりしや此御息所の法身
に葵上の御身の内へいりたることや
あさましかりしほどの事なりとも心ゆかしき物の
られて　細　葵上は霊のいかりて苦しみける也
いとほしき御事にあまりたる又さもうらみ給ひし
いかにやうらみて物のけとなりしを　宗　此いきすだまの事
世にもほとんどなかりしことなるにこそさ思ひよりて心にかゝりてしと
や又ちかく見給ひしをおもひかくしかたもやさしきとも
又人の身とめぬといふことは霊のかたちや云々といふ人のごとく
いかにといふことはさながら又此事は也
人の命をさへいとはしく物にて　細　源の也　源の心得
息所の心深き物のまことのなりと彼御息所の心へき
とも思ひ侍るべし此上詞彼角物にもとんや

御息所又はかなる事にてありける　細　御息所へ御文たまはりあるや
いふことはなき物にしへの情の御ゆかしさよりもとひあつきにた
まひし物にされながらもちかくてとりてかく情ありしをかたり給ひて
あまやましきにのきし給へと　細　此ほどとも源氏の御心の人の情
ありさまとなりけりや　宗　葵上のことはいつはりにされかな
大宮左大臣家の人のなりけりや
まいりのさ後かくとも又きさいのうへしみ給ひ　宗　常にかやうにかくも
とおもふしかくらなるはいかにや
わか心のいとゆかしきまして見えぬ御情ありしにさへと今は
いとはしくかくにはべりてつきせぬ御なさけのわかれかなしき
也　わか身　宗　夕霧のことなりや
まあひきかちかくしておもひをとゝのへていかにしと思ふも
ひかるにや此御心をもちて思ひありとも御なさけとも

心まどはすくおぼせども　拾　右大臣家乃かたざまにひきある時に
なれし盞なるとかく理みて葵上の方にさ出来たるなるべし
此物語ハいつくも此意なるべし　細　只とかく見給ふるそ
葵上ハ毎々にわづらひしたるとなり
さすがにもひとしくなりし名残にてハひとおぼしてかくて
なのめハ情けなるやうとてとりし給ひんわか君の清まさ也付く
しきなきと此　細　たるは此霊気乃おもくなれハ紀と守愈なきとも
春宮よりかくしてまかり給へる我見まする給ひて参り給ふとて
しきたひ出しれきさまにさそひかくてまいり給ひんとそう
ちまとすにもおまするとききしもまなとも御くれそいつきさた
細　冷泉院よりく細かなひ給ひ也　栄　夕霧此かく春宮に細
給へるさせ也藤壺に源乃かなひ給ふしいそれや
まかなんうなるまちし御乃我　細　余内ある也

さらしおもちのさ給ふく見るとききもやあまりまし思ひ給ふ
さ情心乃あるてかれとうしく見かく給へれて　栄　ちとち
うまいらんとさへと情人の陽ともうしき給ふ也
まにさくひとへはえんまのきおもひさるのかとてかし給ひ
なふよ相まうしちかうきいりきれて　栄　物なるちなるとさへ
さ清中にもあくぬとてちかうわりし参りて源氏をさ
これかいしやくなりとく請し入てなる見えとさなるを
いるとて物なると見るを給ふ情いしく時く見る給ふを頼いとよ
たるもとなり　細　葵上はさらにめしも也
清遣ともまにるれんとさへひ見るし情なるとなまさとおもひ
いつれハ夢此心ちしてゆかしるものほとのなるともさなさ
給ふはいてふもくの心まにいさきもさ恋たるやうにおもへきし
かひきなし　栄　葵上乃夫人のやうにならしくゆかしなるもを

源氏のかゝる給をゆくしやハ院きこしめしてはやくし給との給を
はやくとの給しるをともおもはしけるに心うきれハなきやなか
えまほしきるすいとおほしつれともさすかさかに思はし
ゑきあれたまてそやまて　栄　いさゝかむのいさゝとも給ゑさるやうに
まうしけひきミしつ此の給しるを源氏のおほしいてゝなるや
御ありまいれれるを六条のみやすん所とかいひし給なるんと
人々くわかれうとさへにわいさとわかしきさるする人のいてきたるをも
そこなはれてみとうちす給ふのきしきこそかく御つゝしみさ侍いと
給ふうきに心ゐるしきをおもふ給ふこゑにんされ給ゐるすちを
なくさめくさうれるはなはたくあるかきとまてみなれ
給ゆるされたると　細　源の乃給や今様のゐすいつのをさるひ
給ろもこそくなりや　孫　おほあも
としゐならすをはらぬ事ありておもひはしんとあやし

きこえてうちまかせらぬ給　細　源の後悔也不足とも思ひ人へ
也　栄　清中此まなくこもあらまほしと後悔也とそ
流るとみとふりまてていとところまりてかなんかやう也それ
おほかたの清ろかまことにいとう給しからんさと　細　源の詞也
宮の御とおもはしけるに心なくやとはおほえてなくしはまもを
おもしき哉　花　葵上の母宮也　細　母宮也　栄　かやうり
源氏乃涙流んせさんいまとなくおほえてうましくもんと母宮の
まことおもしまをハんちなくやむ給いんとおもくなる給心やと也
ゑ哉やうなん山はなく御ありし侍して　栄　涙おほけ清んもとらく
すいせ給なく侍り○のおまへの衣へと葵上此御おもなきう
しや出へと也
是ハ乃おましの衣まくそ　也ようなんさる人へし　細
何まゐとりひそくまてなす給へハなる人ハかくなとかし給そなと

宮もとけ給ひていとさかしきにうち清らなれて出給ふなと
花 大宮の葵上をおもひ給ふ人のやうにおほしけるとにや有ぬ
ものうらみなく人のかへともうち聞しの給也 細 母宮ハ
御まへにわきさふらふ人のやうにあはれひ給ふを云也 孫あまりに
葵上ハわりなくむつかしくともまなふよりまさりて人々ハうち所
うらもあるまじの給也 栄 葵上をわきさふらふ人のやうに
母宮ハさきを給ふ人もあやふくにくやうれ給ふやうにも出家ま
やと也 一説ふかく宮のあはれなるとをさやうにあはれひ給ほ
とに源氏をも治おもふてきゝとのたまふとも心へ上葵上ハ源
氏乃給ふ詞なるへし
常よりもひめとく見へてなしてかし給へり 弄 葵上ハ源
氏を又見ん給はましうさ悲しき也 細 葵上ハ源よ目をさめ
て見んつるし給也

秋のつかさめしあるへきさためにおほやけにも参り給へと
河 春ハ除目を縣召といひ秋を京官と云也 春ハ外官とて外
官を任せらるゝ外官とハ外国乃守介掾目まて也 縣
召とも云也 京官とハ京にある諸司なとを任せら
るゝなりつかさめしとハ外国乃諸司をとめて任官
をさるゝをもて云也 除目ハ天武天皇四年三月始く
弄 春ハあかたさめし秋ハつかさめしと云ならはせる也 一勘
細 八月也 栄 除目乃執筆とて堂上の公卿一人そのよ清を
給ふなり家によりて沙汰を給ふ事の有けるを大臣
のあはれひ給なり
見るうちとけてのきはの給ふ事ともありてとの心あるよしなる
見給ひて〇も 河 八労も官乃所也 弄 左大臣ハ息たちにうち
私誌家 細 人にはるさ所をなとかやうに給ふ所

絶(セツ)するとの心也
みなひきはくき出絶ぬ原のうちへもくあたにおめやられるは
もとに織まさん乃清むしとせられあまそていと侍らうきをひ絶
内にはけせうるしやうく絶ふほとをもなくたえしいひ絶ぬ
跡きはくさ　宋　清車也
あしとうふく雅もくまくて絶ぬれハちもく此歌たるを
名れともくまりともなれ清さりけるれハ　和　雪ともあめむるを
云心なり
これらは原ふれたちるやうなりのくしうを清まく絶とにつる
うえるうともなれぬ山の底をなるみられの便をもちともえ清うし
河を絶えほとハさるをともも空ニひえたとたうけるに河さ
ましなれも　みなとやられ　細　河るともうちさまうしる
ことくなり

原のうちれへとのみてはるるをもふちるのまとそうしの
使なると云ころもされと　花　此相業花物語みをもるを柱るを
又人なると乃行あるらん也　細　靡亡しくるちるちるも也
えもそしつ絶ゆすりみちうく公つしき清ふすとひとも侍也
おそろしさまそて見へし絶ふ　河　不次動(ユスル)響(エスリ)音　日本紀
宋　さうるとおきうくなく清まも也
清物の雲乃をひくとうるいれなりしと物けして
宋　絶入乃変也
清枕なるとをさなうし二三日乃へまう行へとやうくうる絶
なりとものはれたうきるとと物けしたうるわとた名れもく
いとめへし　河　死人ハ枕をとうするあるとなく　細　死人合
必枕をとうするあまうし物のきを左うやられるす志まれ
とそおしうやめをしてとさ絶と也　頭　頭死ハ枕を

どうは蘇生のさためも相死のやうにまうしきこえゆる
なひは結とりも給はぬとや
大将殿ハさりかしこまり給ひて世中をいとうれ物思（まうけイ）
時しもこそあれハ　某　葵上のやうにあり行うたとに世中を
猶の法ハきさとなくてうかやや　孫世中をとうまとや
そうあるぬ法ある里の法とうへひとまも心うしやのことにたへ
てお法ほるく流にわかりあけきことうひやすしさも給さ
何か色うておまてなしあるまとうまてしさせもおりきも
ておもしくき法殿のかとまある人のうへにさうさうしくかた
しきこともし給　某　源氏の法思ひうまむの法うかくよ
まれ法とうひをも宮まて御ゆへまんしとや
いまやうくう行と法まくにの海まうあるくうちを
給うまうもれあるれんるくもつきせは御おほしまとへ也

ひろくて日法まあれハいうくきせんとて　細　ちかくれなま
とし給間まり日法をてうこあられ行とや
某　葵上の死相のうちを行るとや
あるも野まよあてなまる猶いとりうくもをまるまるまとも御ゆう
こちうくかくさ此法をくつせんとも幸く此念仏の徳あるとうこ
らひろさ野まは所ともあるし流ととも行しうさとやさはさたれ
つらや去宮あるとの法はうひ行しぬ所くのとも来りちるひ
てはうはいかへしさき法とうへひとゆき行おとくきこえうち
ともあるき給ひはりるよとひろのせも思まわりく行うるとのこた
とくまたまりて　細　葵上死去ハ十四日の秋也葬送ハ廿日
あまりや　某　月ハ八月也
まことよるや　彼　是ならかうのやうて同心見更衆も
こまハたまひあらく思也　此記みつく多て細見

細 文選第二郭璞江賦神蠑蝹以沈遊 注云神蠑ハ蛇
也蝹蝡ハ行皃也又日本紀第二豊玉姫化為八尋大鰐
匍匐逶蛇ハ川ニ住をよくはひありく魚也
孖 河内流なと云此詞ハまさしくひたすらやうに 栄 古よりの説と
説ありそれも怪あやしき所説ハ方角もあらはすまうましと云
といへり
もろこしの紀行ともある龍の人をまつりみまくる歌をもなをしかうし
のたまふことしきなれと 栄 和哥をとりて書とかく此句紀行也
いとも大なれさまに清らかなぬなかとを清なるはなたくはかなきぬ
くらからうち 花書骨の事也
はなのなりけれと 細 源ハかくかく人の心もよく成るとも見給ふ
るゝもしのひと也 栄 源氏の徒然也生死ハ常此心と思ふれと
源氏の心にかゝる事を思ひ給はぬと也

人ひとりをハ深くしも見ぬ程にあまたのすれハいかやうにかくひとつかく
おほしこらるゝ事 河 人独ハ夕良上るか是等源氏源
氏の縁とみてるすゐ紀と也 細 人ひとりをハ夕顔上
と云也夕良上をうしなひしるも人独かかくし
清あり
八月廿日あまりの有明なれハ空のけしきもあはれすく
なからぬにおとゝのやみにくれまとひ給へるさまを見給ふも
ことハりにいミしけれハそらのミなかめられ給ひて
細 おりから義なり 葵上別給時も此秋の月なれハ
思出し給ふなるへし
のほりぬるけふりハそれとわかねともなへて雲井のあはれなるかな
細 源の独詠し給ふ也 栄 葵上の煙とてそれとハわかねとも
とりわきて煙のそらにひろまれハ雲井の義なるなるへし也

今日ハなきとく此雲の中新に吹く衣なるへし
夜ハねられつゝても露まとろまぬ中の通路のみしころの涕
にうきとおほしそてはなみたとのつゝしのちのひとを
しなてんとのとくにこひてなきさのみなとなつきても
せたのしられなきりなん世を思てうらくなりしきものゝよ
こひくすさきもて給ぬるなるとうやしくさもとおほくおほ
しはうきらるれとうひるへし　なきとうはなれ
細　平生乃詞にはかくしとはなるふかく見えちからなさるへきと云
しかとも也　栄　源氏と葵上のなからひやうき給しとも
此世にはみえぬ御心の給ひても也　源の法忠ひお
もひと葵上は今しき物よこゝ給しとも源乃なやし給也
みそめる涙のまれなるも多かりて　河　みそめる法鈍色
ありしさうらうさんとも　細　本妻の服乃色也色のこき

きさき軽服也　栄　なくなりめる人の妻なりもと云云定に服へし
我さへきさましらなかくうき給はましかはおほしきと思へ
河　夫乃服ハ妻の服よりも重ハ紀濃なるへき也惣云令云夫ハ
準父母服五十日服一年嫡子生なるとも一年也妻ハ二年也
軽服の論り　細　源のさきにちなみ給ハとも也夫の服ハ重服也
於　夫乃なきめハ心重なる服へし　栄　女乃死ハ服廿日三三
月也是を軽服と云也おほしはせたれへよりのにしきてみえし
かきりあれハうすゝみ衣あさけれと涙そ袖をふちとなしける
哥　かきりあるとハ物忌令なとの定あれハさのみこくとそめ
ぬとも也　細同　限ありて定ある軽服なとそ給ふると云也
栄　生前よ別の様に体式衣乃色のうすきをいふそ
栄　如式色乃うすさは浅なれハ深く涙の淵
ハ袖にのこりたるとてもしにしまさりて衣の軽重あり文日

我のたまへてさうしくまくちるなといへり以上抱言令見
完とある経也
光て念せし給つる法さらにとくあまめしさき法を無経
無ひやくにようの給つて法界三昧普賢大士かとうちの給へる
河 法界三昧ハ普賢菩薩乃徳也天台五仏頂梅云傳教師作
南無法界三昧普賢相又大唐西院和尚礼拝詞ニモ
法界三昧普賢菩薩ニ文句云大論釋ニ菩薩為ニ大士亦云
開士 弄 観音ハ慈悲と三昧と消しほうきとし 或七等ニ
一聚合身普賢延命大孫薩埵 細 普賢ハ法界におう
ゆる不絶と三昧とあるも也大士ハ菩薩也
おこるひあれなる法師よるとハもあり 河 勝也あるをし
きや又宣ようきたられ此色也又賢也又異本
竹の未たとなんまらぬ給也 栄 夕霧乃かるや源氏のん也

あやしく思ひし乃ともひとく露をうれハうつくしかんなる人へおもくら
ましうきせをおもひしあるくさむ
河 後撰 むすひあくかれさせ給ふさまうせハ紛はせちの方とはまゝ
弄 細 引 奇同 孤同 誠よくかなへり
宮ハ志りこつかくもそ乃ほまうにおもひ給ふを紛ハ然ハおやう
きたるをいへる人とこいて消ゆかうるとせさきを給
さらにつゐにもそれゆきをも 宮ハ 細 母宮也
消ゆるさるれいとそれたまとせさもお給もわりしらきをさうとに と
あまれハ消えさせにかれうちかん 細 此頃ハ處々れ経営の
こ細しと思ひうちを乃るとの出来ぬるも此物語ハ盛者
必衰乃理をも思はつきなと葵上ハ夕霧をうみ来
里て十ぶかなる人きたに此ゆ出来ぬるに弁くて七月く
のうみなるへし

あやしくもある紙をたに人のおやハふかくとゝめるものを
おとろかさるゝ 細 菓子地祥(ツヒラカ)にしてうき事を 栄 人の親を
くさハなるゝさへあはれなるハましてあふひ上ハとの心也
よそへてひなともせぬとなたにゆくくしき御用につるに
細 女君の見すてかたきも也 栄 おもふ女ハたえく葵上の御也
袖のうへの玉のくたけたるさへもとめんとうちもおもふを思はすらり
たる君ハ二条院よりうちに 河 袖上(サケテ)掌上(シヤウくノ)之珠(タマヲ) 離(コウス)心中之江(ヨイ)
奥入云或経ニ本文袖上(ニシウ)ノ珊瑚(サンゴ)と云句也 弄 本文不
見所可尋 又切なるへきなるへし 細 玄抄を云也 本文不
見所 栄 此詞色々説アれとも人をなくして切なる心を
見るへし
あつかさ深きもやむことなき行ちに義よ心ゆかう御用に花をもとむ
てあかしうなひとまつたしみかりて行かしくらし給

はかなく成ぬ 栄 うとくもはなれ給はぬとの心也 白紙
まことのさまにて清文かゝる事そなしう給 栄 源氏の詞也
ひあつかひされぬ也
斎宮も去年ハ大内の左衛門のつかさに入給ふへかれと
河 斎王三年(イモヰ)斎間卜定(セラルヽ)諸司へ入給ふ也左衛門の
府ハ過河禊之後以宗[illegible]以東廳為[illegible]としておくと云
宮入諸司儀兼日上卿着陣(ノ)令勘(ニ)許禊日時(ヲ)并定
申前駈以蔵人(ニ)奏聞(ス) 武度上ノ弁 為同被定扇五位ノ
蔵人為勅使(ニ)此若(ハ)五位ノ蔵人無(キ)日ハ御令度上人
調之頭若(ハ)五位蔵人催遣(ニ)三車(ノ)牛(ヲ)并内侍典侍(ハ)蔵人所
前駈也 次入諸宮(ニ)一如以入諸司(ニ)儀(ノ)ごと 細 八月に給
へ給つる也 去年中に大内の諸司へ入給へきをさはり有て
とる也 左衛門の律さへ入給ひしかりたれともとちやあ

かしこき人にさへたとへのつゝきハ徳無也

宗 けしからぬかねとは人のことゝ翁よき事也

いとこの下にはにをよろしき事にとも人にまうしき人の如よ

ひ給ふは 河 厳重(イツクシキ) 潔斎(キヨクイハリ)也 細 いよいよ潔斎なるよし公にハ

常の給也 是されハ源よりも事も事よそ給ふ也其下網

皆源の詞也

うしろのひまよりみし世とちかくいとをしう思給ひて

細 源の御心也夕顔上の事とのこと也 宗 源の常よ世の給ふ

らめしき物にもあらす世の中のにくゝもかれたるかいのと

りしことゝ也

夕顔はしまたにそ侍りしまゝしうハ給ふかしこさは給はぬ事

あかしのまゝしき物語のもの事 細 夕霧の事也

宗 法上の事としかれる也

まのいたんの婚兄此所のかくしよりて御かしらなんとは所あそ給

をかけしやりけるによりて御法丁のちゝにむかしとかしこき給

よ度ふりハへてハちかうめしてこそとくのへたとさらはきに

まて 左いの婚兄 細 忠也

河しもあれと殊兄うちあるに壱とをこれならるかるとよるとも

所のかうえも給 細 引声阿ニ同

河古 阿しもあれ殊やハへまかりかへきあるはかみるに承てきぬに

法念仏乃暁をこちとも思ひかし 河 常行三昧 引壱阿弥

陀経を誦する也 細 ちまうとかなる僧と事也

あうれ枕の所のれまとかり行 細 引声を度々へしてそ面白調也

此乃音ちかも末をあるかれとかつかぬ法花をかしら給にあそし

をも給つるちさしつゝをの常にとられしに 河 吹かれハちかきを

末ともる事風と色ある此物とたひかるの娘

弄 引哥　河ニ同　いつれの哥もあさくも心ゆかしう哀なうらんやよ
ろしうるへきあまは御とく秋のさ夜風吹すへて宿りにたく
の音すまんとつくるまも哀なるへきさうや
菊は久しきためるままなりとなりあとみひのここちするさはせ
て　河　菊乃枝みそ白色みつくも花乃紙みつくとなるさへを
れもむまさ乞もさされいまつみひの紙よ付るある菊
のやめ也　花　あ紙みも花田よあともとのまうしまさ
や　弄　色うを作るさる称也へし　勝志乃まへの紙色
也菊をも同色なるへし　細　末開をたうちれあとなよ
ひとともに花田色なき也菊の葉色よかよる成へし
栄　花田八まそうし萩のやうなるうそれうあ紙をもまたれ
まうし穂ある紙あるへし
あまさきていふみ哥をもあめしうもやてあん給へハうあ

乃清くいあり　栄　清く此風流ある時あるとのやうに何くしや
清みるまをともそてつひうるるとも也それといはまめしき
と源乃物語しめすん也
安くの清とをおかりしきるらんや　花　人のなけるくハとうたに
清くさ此を作るやうなれともなくぬるや也　細　文の詞也今
あけきハとふよ清くさ此まよ作るるあまさ此清とも
具中なるへ也　孔　斎宮の清こさよ入るるとによりく
安く給たぬをおかりしまくんとも也花乃説りく
人乃安紙哀をこさくとも奉をも花よとく宮て禅紙をひとそやと
河拾　東路乃草葉をもわん袖うろもとにろて袖そまつハ奉けき
弄　菊まよるへるる也　細　菊の心なる也　栄　宮まちの哥や
葵上乃哥をも哀とこさく也下みて菊ともをせそてよめ
うちそれよ源氏乃とくれ給袖乃哥をとこひやるを給とも也

なくいさゝかに思ひ給へあまりてなんと侍り
弄 思ひ給ふるをもいかに思ふまゝにて思ひ給へとも也 此は息所の
まちくれ給へり 細 思ひとの事に思ひ給へあまりてなん也
云之又乃詞也 花 上詞よ此のしぬ猶さとある物やうに思をと
らひ給へと打かへしまゝうかされて出る也へし 栄 此は
八斎宮の精進の時なと思ひ給へとされとも思ひあまりてと
て又とよみてまゐるの宮も所乃也
はしまさんもいかにもうちき給へるれと 細 うちとけたるく
御返歌とも
御ふみとけたるかたりかん給ひける 細 との時にはあさうも此
事ハちうとう歌さきれともうちとけたるさこと也
流れるの流とかくひやと心うし 細 打よりつるといひて
栄 霊気よりて葵上とそのところへ給ひてと又かうかへし給

まとの句也
細 涙乃句也
たゆまやてうかくしとゝもひさとはなかんといふと打しき
人の流れたるぬくさるゝとおほしきる 栄 息所乃異見
事世中にひろく云ふてんるを源氏の御絡句也
とたしく人もうてもうくかくもはるへきにそもの給ふせめ
細 葵上ハ宮(ギヤウゴウ)葉よそへてなめとも 栄 葵上此涙乃ハちえ
世乃なにとて出也物怪なと也
あなてたりしるとさうくとあきやうにかんさうきもんやくや
しきハりん歌いしる袖え打かりたる袖をもとしさなめり
う 細 さやうに霊気よ息所乃出給をかくしるも人縁なる
とかく出へき物をかへりやしさとも也 花 物のきぬれる
とれらくやこの給りは八月御おほしなるとをとらると

ふくさうや

野宮の清さよまはりたてまつりてやるもひさしく

細 とて野宮ハ一段の神さびたるによりて此様気乃尓まし

乃文ともあしくもあるやうなりし也 源乃さため給ひ給也

思ひよりてひ給へと 某 源氏乃とかく思案し給ふ也

かさと何る清りかりすくハ情なくやとて 細 態ととつれ給

と清かりけりあかりてうかひ給也

世乃みえ給へるうちに 河 世乃うちろくてみひさしきまよひさうら

あり 花 花田まあるそれ乃みえみる色也みえめ様ハ何

世も服者乃用る色也 細 くろきからも也みひ色也

ちまちまふほと色侍るまあるもと心給へとこうしほかり

弄 花乃よれ詞也 細 又の詞也 此類も中度んありし也

はかなきほとハ清てかりしまうらんやとてあん

花 はかなきほとにさとりてかりまかきこえ也 花まうちもとしけなくとく給

進ていせ給ふくらてくちても給へきとありてもりうちもとて出

えぬとも也 細 様気あるによりて聊爾なる也

花 又の詞清らも物にかなへるんと心る様葵乃うまと云原

云難あや 某 源氏乃云給清らく ハうもまれとも清まん

里乃給かりそれハ宮も清もそうくるを給へまさ 然非

前とこうしぬとも也

とあるうもこさしもかれかりまかせに心とくらん様うそくま

弄 心とくらんせハ宮も不の物気色ともに成給ひし心を用のあり

し給ふ也 細 世間乃無常 とかくりト出ま宮も不凡物の気

なるとに成給ひしんと用のありし給也 某 源氏乃清度あ

やもん無給葵上も給へ給ふ源氏をみみあ常乃せうといかう

又何るうちもあうれるよみさのこゝろおかりしうちをそされ

こゝろみせよ教訓し給ふなるへし
人の心の御ありさまをちかくより給ひて心みはまやとて
河 此ほとのことこゝろえかたき事をもちゐ給へとある神なるまれに
猶下の文とはかくも侍らんや云々也 花 何事も
あくまる世はさのこ行かたきそやいふかしきものゝまにに
入給ふとほのめかしたる詞也 細 何事も世にたくみなるかとく
めで給ふかんと詞をは何事か也文をも心にと教訓の詞也
弄 若きのうちしたるとのつる也 宗 車あらそひのころの
ことと云給へと也
源氏はもと思し給へり 花 斎宮の御ことをはなれ給へる
を様下の雲文ハ行くも侍らんせし源氏も事のまゝに云々也
弄 賭弓のまゐるも此文あれも侍らんせぬることもやとてば
文をも思ひなと云はしさぬやうしやうこゝろをさる詞成へし

細 河内本源氏もおなし花宴の秋も同之御方書表紙に
ハこれとあり心を宮とに乃詞に心えぬほとハ行割き
奉らんやとある後ちまよひこれよりも見る人しらぬさ
と同也 宗 六條の上やまれとも侍従せ給ハつひ
なりとて懸みるとあそひてさぬと也
さとにあるひるほとあり見れとも思ふく見給ふく 宗 六条の
宮にありや
ほのめかし給ふる気色と 細 若のみや御ありさまちしてほと
乃詞の事也
人のおもふこゝろく見給ふく 河 鬼やいはそろしさ也
宗 奉おやまよとぬるをとくやすらんとおそろしく思ひを
心乃鬼と云ゆるや侍息下のん也
されたるや御ありさまもいとみえし 細 我霊にもさるゝの

二 さること成なるよと人乃物かたり思給也
なれはいとうきをもちる大方のさまもありけるやうなるき
はしありて　細　御息所の心
侍るをも人にかたりはさむ　宗　桐壺乃御はゝ後乃事也
宮をもて不用の也
こ前坊乃御事をきこえさせ給ふ中にもいひしらせ給ふか
りしをも御をも行て　花　前坊ハ桐壺帝の同兄弟なれハ
斎宮を御の御むすめ御めハ多く御かしき御もやみて
内侍とし給へとも宮を北乃方の御はゝ乃御の御の人
事也　弄　桐壺の御や前坊と御兄弟なるよし此御事
ある也　細　御兄弟なるをも北の方にも行ひける也
此斎宮の御はゝをも給ひたるにこそつきにもいとし給ふ
宗　斎宮と院乃御の御給ふまてをも給ふとのなるや　是斎宮は

とハ一向乃他人を賢を云給ふとても親類と養と云也
それは内かはしともやうてかねてもありけんるを御心に
の給ひをやてて内をも行てこそひくやうしきを行し
とてにいふ御めし北をとも云ひく給ふまてしと
弄　六条御息所と前坊の後桐壺帝の御事おもしますきんと
の給ふ也　細　前坊乃御かはりにもと思すハ御心をかに
よなく内侍とし給へと給ふる事中給ふへし也
自然院の御の乃心をも給ふのみてハとて兵の給て
御らしかる也
かくれなるをはつに　細　此源乃かすよあをも御心もとも也
かくしき物思とてはやふきに人の後は人なるかしきうく
きこえとく物思ひ見てゆるに　宗　源氏と人とうし給との
なると御息所乃おもひ給ふ也

行末の時とみるもおもはきはさるはおほしたるの世をまつりて

細 知るも心あるかなや

心ならずもいひけることしありてなんより世をこそ物しなり

思ひし 細 よしいひける人とや 栄 世上よ宮をも深くあるまじき心ゆ

斎宮の中やまた斎院をと手をくおもしきはせんと思ふ事

まことにあるとのよしやさての事ハ事よれ批判すや

野宮の事の沙汰かつらいの給ともあれしう今めかしうあるなり

おほくきこゆなりて 河 野宮ハ四条乃西の末也 花 延喜式

云凡斎内親王定畢即卜宮城内便所為初斎院祓

禊而入至明年七月斎於此院更卜城外浄野造宮

畢八月上旬卜定吉日臨河祓禊即入野宮自遷之日

至明年八月斎於此宮九月上旬卜定吉日臨河祓禊

参入於伊勢斎宮と業斎宮ハまゐりて三年此法神事す

みてこの中に三度の御禊あり初斎院へ入給はんとては

大かた人明年野宮へ入給はんとて又禊する年伊勢へ

くたり給はんとて御禊あるなり也野宮のほどうつろひ

は三年めの八月のことなり 細 諸司よりも野宮へ入給也皆

見物ハ天性よしある人なくへんとよをさまる中に

涼のあそび給へるや 栄 御禊斎可然させ給とや

殿上人ともも二条まつりさるとハ斎宮の御ともをあまたくれとも

心のやうにらんあるれと中給てとも大将の御あはれを

栄 可然人々朝夕は野宮へ参通とや 此時の御ありさまなく

さまを行とや

おとつれとうし 細 人々と源のおとつれも中ての給也

ゆく人ハおくまでつき行つる物に世中にあきりそくくる

行方もしらぬしくもあるべきをきこえれとさすかに物思されなり

ゆへもなくまて　栄　御息所をゆゝしきさはんとも

清涼殿の御すゑにはあれど正日まではえ行まではゞかりあるぬ

清涼殿へをとゝもしらせ給て　河　正日と八四十九日の事也

御息所は清涼殿をゆるすと八追善を引こそ行ましける

細　四十九日のうちと云也　清涼殿の八四十九日すきてうちにまいる事

侍従へし

三位中将ハ頭中将ハ世中のをたよりとゆへて世中に紅梅綾なると

細　頭中将也三位は頭なりけるにて見なくみえつる　栄　花宴

歩きは正四位まで見えしさるを

よめやうちならぬとも又まさへの見るとをうしさらと見さとも出て

出しくさるめ出て紅也　栄　宮へしさるの文なるも

妻なるをとるとなくにふるを頭とも也

つの御所をうちるゝひ頭の若きをひまたあはれなるめる右大臣へ

うれ内侍　細　源内侍のすけ也

あるいとすゝや　細　源氏翁也

ねをはとくれにあるいてまうりさめ給ふなり　とまことめ紀の拍子

ら常におもしやかうしるを　細　うるさ度と云也

栄　源内侍か美人なる也にて此の付けるを給とそつて　あゝうつめ給ひて也

かのいさよひのさやかなるさらし　花　是は末摘花のうち也

頭中将寄りまろきもに大内山にはいさよひの月をと給

しへまたのする也　源の末摘花をあひ給へるは頭乃妻也

行くいさよひのさやかならさらし　枕とハいへる也

細　是そ末摘花にはひ頭しけれのなりいさよひの月にさし

ちの宮みくる頭中将の源を見あるうしきけりしる也

頭のそるとゆくぬもゆかくれまこそれるはまるにに

くらるるいひあるうし給　細　末摘花さへに後朝に頭中将行

移りきたるをとこそうかれし時のまゝやかて此句をとかり
て心得へし　宗　さやうならむしやるとところにてさ
るかたのあはれもとれたる別路にも見るへし　此段女房たちか
やかれつゝさらひもあはれなるをとゝ花るゝ一段に
見る路とみえたり
さてくはらひれたるせとひひくてうちたれたるとも
路あり　花　世中とうくひくもうしこもちくもまり
時雨うちして物あはれなる暮つかた　細　是は絶日の事也十月に成
同日のことなり　一段也上の詞の
てのるなり
中将君ひとへのなほしさしぬきうすらかにころもかへて
花　中将君は姉妹の腹三月以後汝廿日也純色垂衣卑
緇冬練夏有喪服亦生喪服猶更八衣同純色八移花

みゝ深やうもしくや八十月の更衣の時よりとりく
あはれとも　細　中将の君衣更衣の次に純色とうすき衣　行
也　宗　十月の時又衣の時は純色なり前栽のはかなきなとを
いとをゝしうあさやかに心はつかしきさましてまゐり
給へれは西のつまのかうらんにおしかゝりて霜かれの
前栽見給ふ程なりけり　河　雄稜　日本紀　雄々しき也
細　思々しきの義也
風あらゝかに吹時雨さとしたる程涙もあらそふ心
ちして　細　面白きさま
雨となり雲とやなりにけん今はしらすとうちひとりこちて
つらつゑつき給へる御さま　河　宋玉高唐賦曰昔者先王嘗游高
唐怠而晝寢夢見一婦人曰妾巫山之女也為高唐之客
又云　且為行雲暮為行雨朝〻暮〻陽臺之下

有所思二首　劉夢得

庾令樓中初見時　武昌春柳似腰支　相逢相失兩如夢
為雨為雲今不知

鄂渚濛濛煙雨微　女郎魂逐暮雲歸　只應長在漢陽
渡　化作鴛鴦一隻飛

劉禹錫婦まとくまて作詩也　細　劉禹錫か句を引
女みてハかんまてこちかくなりむしろかなしみをしまとまりもすん
うしなひてめてしきこなたちにちかひしもりけれはくちをしうつゐにありへ
きえもはてたまはぬものをかくいふ
細　守ぬの心也　弄　源の詞さ海のあかりまにかしくれハ夢
上れ魂ハありしをも源氏まそくまうしんと中ね夢上乃心
をしいりふての心也これも中ね好色の女め代ん給也
ひとたひかうしたまひけれは給ふ　花　夏の紐乃横しあるにより

てとりあつかふへし文夜ハ重服の人とも妻號ありけるん
や輕服ハ文夜勿論也然とも心さしによりて文夜せぬもとく
乃不都合るへし　弄　花鳥説猶用之まとかきてもまとそる
ともかうしひきはくろひそ文夜れ入紐なるまとしし給
ひるなへし　細　花鳥説ありてもその中ねのちくまとゐ給
あにひきつくろひ給さ海ちるへし
これもいまなくして海やられる夏乃清なる紙しに
河　源氏ハ夫婦なれハ中ねよりまハ服色こくるへきを
ハ濃きかゆきりもしれ也抑夫妻嫡子生妻也服廿
日服一年　抑忌令花　夫妻服三月　源氏ハ文夜し給ひ
純色もかさりこまやうか心深しの淺深もあるへき
也　細　中ねハ文夜し給へとも深きかまさりける也
義し給也志の深さ也　弄　輕服三月也　公家同　花細ニ同

あ乃はやかられるひきうき詠むくやつれ行かるゝも見えくくとあり
ぬきくちてもとなる　花 臙脂よ紅の綃を用ゆる事は天保三年
二月一日宗子皇后心喪よ御堂関白強て色乃下襲を
着し給ひ見えしまて政事要略よ云を細志るしあり
弄 臙脂よ紅の綃を用ゆる例はあり見え花色下襲乃事也
見えたるも花色ニさめの事也といふ
中将をいと哀なる事見えにおもしめ給ひけり
細 妹なれとも俀とされとも給也
雨夜とあり志ろしてる光源氏をいひ達乃ことなる也まさきて給ふ
細 源乃猶し給ふ句をとりきて中将のすき行也
孔 頭中上乃猶よ雨とあるりといふたに役あり
宋 頭中将事と不知と詩よいへるいふれのことを云まて事の
めむと云よおもしろく源氏よよりしもとるたいはおゝ

さとられも独言のやうなる哉といふ
ゆくゑなりやとひとりまさとのやうなる哉 弄 頭中妹の
事なれとも 細 此語面白也他人の事なりとは源へきこ
えを給ひさとる妹乃事なる故へ下たち早下さるゝ道
見えへの雨とあるよし雲井さへいといとされよ乃くろ
弄 此哥もあはれや 細 面白き也結句此後情をこへし中将の
哥は詩の句をとりきて為常此の也雨と時雨とを分も
ありて云也是は見えくへの面と如くしいは八月ころを如
しうもや十月ころまに成ぬるよ時雨のとしへ
見える哉雨と時雨とみくらひくゝる詩歌也 宋 源氏
哥也是も雨とや如まえんと詩よいへる哉うけてまた
弄 はいとしまよる ほとにたるあ絶える也源とん
なくて面白也

世の御ためもいとゞ深かくぬ月ともろくみあれとも

細 中納言の心也

けやしうとしき御ハいとしもあらぬ法心にと院をも并

まちかくの御事をおもくの法にてさうしも心ちうしう大

宮の御法ちにまてもれ給ましきちとかしくに法し

おひされハうしも見あるもて行つて物うきとある法もし

こきあるしとへ御ともあめるちうしもいとしう見あるある

くるゝるをよしとに居んこともちく物まれうこハちとに思

ひやりし御ひあるあめるとも見てうちにハよく口惜うれ

頃もう御つすはもて思ひやうともぬる心ちして

あやしう弁は 細 弁法ハ文太臣乃さ成くまてあり

くの御女文字の法教別太宮乃大切よし御ありて

のほりさにうまへもるもれ法志とあしにと悲傷

のさ成ハまで宮乃志れ深かう法りもあるまといとく〳〵

菱上れはうしをおしさうつ我中納言の上御也

くれけいうるとあり 細 苦痛（クツウ）也 弄 くうハくまうれ思也

枯るゝ下草の中にうまんたうあてしこるとのさされのて

あるう我おしそう御ひく中納言のちう御ぬるのちにさうきの

法めのとれ字おの見して 河 拾遺 十月をうるとにほ夏を

おもしてくのとゝてるとされハ 冬きすれと見ゝ帰ね

まだ見たれハ色へとこあるおまいうらあるとと 弄 式京御移也

細 式京面白し中納言乃子御法あるく大宮へまゐる御也

弄 見ちんそうるすてしこハ色深く御物也祥去月乃さ成殿へし

さようれの雜まおうるまてしことわりまうし姉乃かうさ見んとこそ見る

入 源大宮へ乃事 弄 あるまてしことゝ大事にハるとへて菱上

ま別御後のうるとみ御わや也

今ひときはなるてやはしらんせしもうしらんとおもひし給へり
河 大宮へ夕霧をと葵上の御はらからてやはしらんせしはうしらん
と源の御ことなり　弄 夕霧ハ大宮のまうごなれハ葵上より
ハ次なるひとへこそおぼえ也　宗同
まことにさふらふなれ法をこそかそへかずしりて侍りしき
宗 女房也　宗 夕霧のさ成とかり
宮ハ小風まつ君てまた御葉ちりけるを見たまひつきはまして
てえ御なん給ひは　花 後成ハ嵯峨のさとの御とふらひてまめる
細
小や　嵐吹紅葉の日にそへてまあらく成行我なみだかれ
花ちるの儀面白　抄 此詞紛情無限　宗 ひとへ間なき君
に嵐まへそつれて御まして涙も色にいはゝうつる也
いふもさらにて中く袖をもてはやむかしをのかおまさりてやまそなりて
細
恒例お逢かりハ葵上をと云　宗 大宮の匿名也夕霧を

見給ふハなくてなにもひさしうなる紙はまするまはれひゝきそ
まことに中く袖をぬらしはとも
給ひてしうれしくなれそわきもかれ宮よりの衣ハさるとも
とも見るまも給へつるへをともらくそうなまふとはんそうへなれは
細
衣の色めりくきこえし也　只もとの衣の衣ハ此姫君のつくてを
ひある方は此所なる君中へまいえてまう也　宗 源の御はえ也
くる花ほとまれとおもひ給ふ　細 喪中ならば也
手とつてをぬふかれと　弄 源より権宮へ久しく書給ふ
りそくるあれも御方のきさくの文まやとおもふへくとも此文を
御とみくく見つゝまやまさる御心の程をかれけるきたなき文
あれとも女房のとうもあつしかりて法御んせ給ひまうやを
迄とさくの御ともかにたて給ふと　細 源よりあさう
御かゑへ久しく書給ひハされたる也

さの袖とあるハにほふ詩文なれハとられくて作らんせさせ
河 さやうの袖と云詞也それ此袖也 細 河海云さやうの袖也云
詞也手習也例のをかしき文ともやうなきと云へとも此文八と思
ふくみんしかやうなる物言の哀なるをあまれハとうさもあら
しとて作らんさせ給ふ也 箋 此さの字ハよるさしらへつゝ
みえもちへしもにふかく八腕をも取らるゝもいふとて藤つまき
ハそもいふあるへしとられくても八常の紙云あるも
御敵をもちへてさこれハそれかれあねハ作らんせさせ給ふとも
おもの色をさうしれるに 河 純色の唐紙也 花 色と眼
色の用る多也 細 純色也腕色の用る色也
わさてこれ書ても袖ハ香をもそれ袖さ歌ハ法まさ色ぬれと
細 下句種宮よく思ひて云ハ法さるとて籠なる也 箋 源の
寄心ハ此也但十月の法なる袖とゆくる詞ふ寄人の大

頼なる心とそ寄ハ竹をもよそ中ぞそ
竹も附句ハとあり 細 引寄 河に同よくかきて
河 袖云月ふるも附句ハ常りしくをかく袖ぬる折ハあかるき
詞まるも心とくめてゝきゆるはいまるをも見えあるやく
細 竹とよ花うちみも一隣とうりくしきた極也
もくしくらるかとするやさへても宮のしくらるをも恐されし
されとも 細 此詞返ハちるくて可也
せ限をちる山袋之ひやるを中さしあるへし 花 大内山ハ院をも大内
のるやしもるまハたた大将の玉扉ハ宣陽門の内北扉よあり
大大将の玉扉ハ陰明門の内の扉にありともに中重北
門の内也西宮折よ見えるきしき種の姫君の在すにそ
あるくのるをと云ひやとなまれらとくのうちといふとをも
世間りしともへ言此詞よ見えるき 細 院まるを文の詞

花鳥説　大内山とハ大内のことなり大臣の直廬をとは
いふ又亭子院仁和寺の大内といふ所にありしかは
ら北院中納言兼輔朝臣のよくなく　白雲のたえま
はるかに雲ゐ隠れハ大内山とかいひけりとよめる
とかやこれは源氏の物かたりにはなりとおもひにける
かその頃ハうゐ也此二説ハいかにもみへて也　弄　孜同
弄 大殿の直廬大内にありけれはといひやりたまへるなり
宗 文言ハ義居しけ源氏乃事をおもひ入てゐるなり
えやハやそて　弄　引哥心ハ思ひとしとも見えぬと云也
細 なれ給しもうちとけまゐらせしとてあひまゐらせたまへ
見えをけるハ大臣のうちをひて思ふことなれはとおもへ
うちとけてをみるとも床ともえみをぬと云也
はかなしやあかぬ人の猶ハえりまさぬとや

此哥にもとくれぬとていひしよりまたやしつくさしと
細 葵上をとくれ給ふ也　宗　槿斎宮也源乃葵上た
とられ給をさりたまへるをたとへて源乃御をたのみ
たとえ人あらハ
七のことのわかれるをハはれみて思ふなしならうか
宗 槿宮乃せ見れを一入はあれしとや
あなるにつきくをみんとわりあそはせたまふる
弄 大宮れ給ふと思ひ給也六位の袍の色のくれ給へるも又ハ
うちそとあひあるをも下にとる詞也　宗　源乃袍也
大かたれのかた袍ともひつきて給也六位の袍の色とハまくさ
給ふるにも又とあの為袍下まとへる袍也　宗　槿宮と
ほめての給へ
清らなる人しきそ義まお給し給ふ人のほんさまたに記

弄 槿宮夜毎なとのかすをも思ふくの縁也源まつしきこんやさ
ましと侍るよしなれらふそのなと也 細 槿父夜毎なるを
とのへりて引歌の及びは 宗 夜毎なるとのる事を下にて
めると源まちなひこ縁をぬんをはゆうれとと侍りれ
ことめそ志る人さ貞女とよみて文紛まのをとりられ
もとやうの形くの女なるなとを見せさせも縁へしつる
く見まさるもし縁へとも
はれなるしたる人こさ程と此義ともとくし縁の故なれともか
あふに情をも見せす人こさつらさをすれ 細 槿の姫君と云也
まなひ人つきよしまうへくめに見たるもとまうへ縁もまうれうん
をもてきなり 弄 六息なるとのきとりひたくすくお侍し
あれむる也 細 此息深なるとれあくひも世なかの更つき也と云
も更乃紛まちれ人をあくんのま也 宗 更なると云の法を

をと云縁也ゆへくしさようにあまるまくくへの見すると見ん
ゆかはと唐の物名なるとのやうなる経をも出すや紛らさ
やうに弄持ちる人みなうちなるまて経出す来物也
さいの姫君をと侍ておりつきそしや物源をも清まへくみゆく
もひしやとのへりんしてまよひるてわかとなきされと 細 堂上と
へまく和歌つきそてん乃よし也 宗 生前也そふるんや
堂君をとは源の可抱人まるそて紛らんとの由也
さら母なるれるをとなく紛ろしん心ちして 細 源中家秘抄
まふ蓋乃はしきいたちともまちあたつれ
見んぬ源とうしみてへくこるよんやお源しぬそ心やまもれ
まさなりさりあるそてぬれて物源をなるつちちくいつら
せ紛ひくはる人くきうきるをれんくい清前ゆへく物語なるとせさ
を縁ふ 弄 堂上いまそさ宮あのをもなくも物えてしなるとなれ経

かるや　細　紫上の人かんゑいとうしいはらからハよまし
こさと思のゝ御中もさこそ也　栄　いまをつたへあるとそやんさ
新中なるとも人まとなりけるをも人々れとおさたまさ
ちゝ孫なりけるそ然るにはん御中もきさとや
中納言の君かいつかへとしろ母ひ御胸しうと比はなひ乃
ほとハちかくさやうなりちふもち御孫りに衰なるはに
んかれとかんをまつ大かゝるみそかまかりしうひ給て
細　葵上ハ其女房也源乃人を孫へ也
かうこれ目ころはかるとよもとに推もくまけつてかなさ
なく　細　源の詞　栄　五十日乃うちのるや
見ちかれくてえしもほにまうらにいらひしかくや
河　みなれ其代ゝなれるれていまれなみ乗かくへやはかかしや
細　引分同比分かなくなるも　栄　かやうにうれくて後常

にくやうにすくハまかりかんやと也中納言君ハもまの人源よ
つろひ給時も紫上よはつまやはまつし人と也
いきしき事なとも代の細かくうちもひめくらはそうた
ゑらるれるの御はりのまへれとの給へといとくみなるほとて
細　葵上乃るや也　栄　源氏乃詞也かうしさうは葵上ハ別乃
るや也それハ先世のなる御まう詞也と云ひめくらうはとを宗
媛のるりた打めしめくらすそとや
いまひるれはうなハうときれくらは心ちくし侍るとも侍る
物まて　細　みかくれ中納言也　栄　これを女房たちの源まの中納
也葵上其は別ものいまひるれとこれとなん母乃るや
はからねにおくられてさき給りんほとなき新にそ
也　細　とよろ　媛ハ源の往出も何なるうちとへこれにるや
栄　源氏乃葵上とももし海さねて比度つてをいつるを給り

とのゐ也女房たちの詞也
常にもやしなひて　花　燗よもをしみあるはかりなり也
家とみえわたし給て　細　源のみえわたし給也
なかなくまゐらにとまりし浅くもとよりたゝし給へれ
細　源の詞　花　いつてさやうになかなくはいとをしへき源氏
のみ浅くみえたゝし給との給也
心あるはかりの人をはおしはかりてこそ給ひあらん物と　花　懐(ふところ)思し
てみえ果(ハツ)へきにもあらしと家ゆくすゑはかりなんと也
命こそかきりあれとて　花　葵上のうへとの給也
さえとうちあへ給へるものからちゐまいり給へるほとそめて
こそれ　弄　此詞妙也如見　細　見ならさとく面白き也
花　後とえていひてさとく也
とめきまいらせ給ひしく給し　花　葵上不被(ヒヽ)にまゐり給しと也

ちひさき君はかくいはけなくちひさきはいとおしき君とていはけなき所に
ともなひ給にみえ給てちいさきわかきも　細　葵上の君め
はらひ給しあてなき也
御てきはしとさわかしそいはえきこえ給へるあまりにつけ給てにて
しうちなく　あてなき　河　紫日記よ上東門院のよきに
此君の世見えてあまとも若はゆかしさをいかなるさまかれ
御事なり
ほとちかきあたりにおしこめ給へらんかたかたあめて　細　程ちかき
いさ給也　弄　二とこもかきもの趣也　花　童女の衣裳未也
こうきかたにもこもうん色のをちかとくさおさるもなし
きをそへくさなり　河　黒汗衫(アサミ アセカサミ)萱草(クワンサウ)色紅の萎えとこそなる
衣也稽服也　花　萱草色は柑子(カウシ)色と大略同あひさ
もそうにそれさへすへてむつかしき也なかうこそもりさきてある

絵なとにきちや黄色のましる也　宗うさきを
いろ〳〵とうきわくる物と也
むかしをとは遠ちん人をはなれてとも　細　源の詞也
おさなき人を見捨て物しける人の名おなく
おさなき人　細　夕霧なり
人〳〵わすれなんとつきなきことぬれくちなんなと
皆こゝろあつくるへきるやうにもなきとの給へと
宗　七条の后うせ給ひ後よいせうたかるや也　古今集
うきふらくありきてこと
いてやいとくまゐりし紙よそなきなりけんやとよいとところ
ほうし　細　御かたの給ともなれ葵上のましくし時のやうにみえ
立入給へさらすとよなましきとや　宗　女房未源氏よ

中詞也　源氏やうにの給とも後はまさるれのこし給はん
ものゝ詞也とてやとも殺端の詞也とてうよひとをき
をされやもほうや同心也
大方はくくにきもく車けくちられさまてけそひ物と
も　細　遠地なとくらまし給や　宗　葵上の法形見なる紙
あさにたゝくひたくうくを給とも
又まくとにかの院にるらんにちるへさ物なと　宗　人にすまよ
のちて宮へなる紙くゝり給とも
わさとあらぬ御かたにとりあけてみるくらくを給ひ
あり　宗　何やなをうくてされあるも
見まかくてのこともって人はくくやともくし給なむと
て　宗　源氏五十日籠居し給ての事也
院へすいなと給は車にし出て　宗　桐壺院の御事也

法花ちかき寺のあはれなる頃と　栄 法性寺にてはこふる也
此寺は法花のことなきなり
打ちきゝわかれたる時雨うちそゝぎて木葉さそふ風あはれ
なきしうちたてたるにはまへのつまへくまのいと
んほそくて　細 此條脱誤也
まつともあるとはる袖ともうつひまなきにたり葉
やかて二条院にぞ行へし也て六月の人へくも
かしこにまうちけんとちかへし名ちかへるに
奔 此時のさ使のひやうへし四十九日過ときてはとまりぬし
歌のひろあるやうちあるたにて源氏の出給ふ君此日ニて
あさちよん出給ふ也　細 日数をかぞへ行く其歌をかきつけ
涙ながしたる心ぞ源氏乃出給ふ君との涙打まじりける
是のこし此感情深きもの也　手負かな付て見るへし

きこえしをもとゞむましこゝのあはれと又なく思われし
細 あまたちとをよるをいちへをかりたて給へきまひくをは
らされたるとや　栄 これをうきをりみてあはれねとめしは
るゝ人くをみな二条院へ渡るもいつれもうちあはしこき也
扨しも宮もそのこと給はまで又わしさはしもにあはて座ほ
侍る　細 源乃出給をいふ
宮の侍まへは法せうそこ出のし給へり　栄 大宮へ侍文書也
院は扨かれなれまとの給ふはするたよろしるをなつかしむも給る
あつさ数はうち出給るにつきてもおきてまてあつくかは
まけるよとみるもいちのこう死てなん　細 源乃詞
栄 侍文の詞也
こゝろさもんをも中く此給へられたるさまにても来り侍
らぬとあれたるとしう宮いかをも見えて給つゐてつかりて

はゝかりもえ聞えさせ給はぬにこそやうやう見え給へり
栄 源氏君にまいりてやさしきとも心うあれハ中々くさきぬ筆也
いとまうてきたるをたにおほしめして 細 思ひし此周章（ニウニヤウ アハテル）させ給也
清神をもこゝろうちにうち給ひにけるよしなりへくもいとゝうし
大将のまへは世をおほしはかる事 栄 思ひし此なるき給ふ也
いと深くおほしたまへは給ひ御心の中の御物語いと
さ給ふくあかぬ御給へり 栄 葵上の御事のこゝろなさは人
宮おほしめさんとて懇（ネンコロ）にあはれみ給ふと思ふ給へん也
思ふ人しう見えうひ給て 細 源氏の心を思ひゆる所也
よろひ又はかへて清しもあはれまなしきるにつゝきてさに源
まめちうこそに給ふ我まして恐るよろしく思はん給へるとされ
給ふ心ともの思ふかねたる人めをもいとはずなるうへく心さま
さきも給ひ給ふ人しられは 細 おほしくの詞也

猶ちさとにもえまかりぬをもうるみ此はいてみてさやう
にみ給ふをきそうせさせと給へらくさくも給ひよろしき花
のさまにもよしたまそてらるゝ事あるうはくしとも給はれと
栄 まひく我は役なとのうちをそうせさせと給へとも
でめて思ひそめての給ひしきいてよくるとなし
栄 物名も思ひそめての給とや御也
まかせるとひくなれうちかへて 栄 源氏君の御給極好也
きこれさ給ふをとれはくさめちうさハうの給ひ殊に給へる
あらぬ給ひしあるまてかほをとも給ふらんとも思ひあ
致ましきはさにちらん猶ゆのもあるまじよそへし給へらん
ま 細 源の詞也
河 未乃楽まとの雲や世中此ところさへくたくなしくちら篇ん
栄 悪（ワル）おやみくにはしきるも花か不完全も完難と

八宮のおほしけるさまにて交はらぬやうにおほしける也
とてもかくも思召さんと中君の給　細　かたへの御心をはなれても
ゆるして源の乃給也
なく時雨をひまなく給へる紙ぬれにとる心のうし
ゆるし給　細　とかく乃心源氏をうらめしくて見えま
いとやさしく八おほしけるをかくの給むあはれ也
宗　かやうの事それかし給也
うち見てうしろめたしとはかくしてうしろさしおとゝもの
あさましと御覧するにも女房三十人ちかき
私　源の御給胡蝶の見えあらはし給也　宗　源の御心
しもの渡乃間なとおほしく此たくんしあるさま也
ところせきおそきすきさまひたゝいとも猶さへおかしとみえ
小さ心得ぬをかくうちしきれつゝあはれおもふとゝ

いとほかれとみん給　そしもりて　細　あるとほのかなるありさま也
杉のきは中にしきへとかなとされは月のかけもとも地の深いかく
おもひのやこやちらうにやちなとおもくさめ給る紙
細　かとしの詞也女房の事也
いとあはれに思ひやりける女房なとハなかなか御いましく
まそて待る思ひやかしり思ふて　弄　大臣の詞なり
女房たちに御使そて家の中との給なるへし
宗　女房なとハなかなかをとうらと一きちまて中やうの也　此段ハおほく
のなるもと女房ふちに御使をそて参とりて給詞也へし
なくなるからしひあてともたく時くちれつゝもてまゐる
年月のなかなるものへさせとあけさ給ひるあんなとをさる
たる　宗　蓬生此別のまゝに也源氏のかへり心給ひとうなし
思ひ知るましきとや

うちとけたりしまての事ハ猶く侍らさりつれと 細 源ハ葵上
の御かたにうちとけてまつはれ給ハさりしや
侍りしもつねにハ思ひわひてこのめし侍ると 細 かやうなる
いふてましきする事なきの思ひしとや 栄 葵上と源
氏とかくやうちとけても給ハすありしと侍り
ともおほく給ふとその二はしにやうなる心得なくなる
事をさてあるにもあひなきのみとハ猶ましきとは事
ともなきものむつかしくとなり
さしもそんなに心得そへさゆへに侍れとて色ちなる紀路ぬ
細 ゆふへなとハいかにも心得なるよしや
ひとあさちなるへくれなゐを紀かも侍る也 弄 源乃
返答也 細 源の詞也色をしるハ心の物とふかきを返
いまよりはさはらんしてんとも 栄 物とされむ

の心よゆかりての故人もそ源氏をもとれはまれしてんなみ
あけさとの給ふへし
まことおかしきなりともそのうたに古き人侍る猶ハとの心
ちなめならて物も侍らんと 栄 葵上のうたとを給ひ給
左家等閑(トウカン)なる紀伊をハはかなくも御心めしなる紙
さんなとて古栄よりかへるなんとのつゝしみ沙汰のや
うなるも侍らん今ハさ思ひも侍らぬハこれより猶きも
とこなる御侍るましきんをと流儀し侍らんとて出難を
なるハ彼ハ御ともとの二ちなくそれにてよみ侍らんいまはなら
むしてんやとて出給ふもとくなりそてなり給へるに流ちつ
らひよりもしはれにけるともなきにそれと 弄 葵上
此方のをし猶ハ地御此かなくそうそれもゆるし也云々也
うさまにむせかなき心ちし給ひ此様のまへに流さるとなると

とうち泣きて　花 源氏の此殿乃御曹司と思ひ給へる無寺

乃すゑと思ふ下此は習権給へるも皆源氏也

細 蓬上もうを給源ともに立出給涙ハせき敢ぬを此とも

きあへひきて給へる涙をさくめをとしまかり

入給を　きあへひきて　細 源也

わりなくてハ、かしき中にもほくえむもえへしはそれなる

涙なりそのきも　細 おとゝの給たるまゝて周章志給さま也

うゐのきもやさしのきも　河 詩哥也

うれしきもうつくしきもまりなきも涙くめつゝしみさ波

まうれしきものを給へり　栄 うれしきまへもむまにさきて心

まゐりても

うらみけれもやせ　細 源の御給をほめ給也　河 賢也

宮をおもふさてあふめ給ふ　栄 さしあまて涙ぐみたるさま也

よそ人はなりけんかしとちなる人し　細 きあへの他也

なりけ枕ふる衾これ也ともあらむ思ふほどにそれにこゝろに

細 文集 鴛鴦瓦冷霜華重 旧枕故衾誰与共　河同

哥去恨哥 唐本にはこゝにあり 翡翠衾寒誰与共とあ

り 旧枕古衾とあるを和本にはいかにやあらむとあるし

私云古文真宝所載翡翠衾寒とぞ白氏文集并

十二唐本引翡翠衾寒也 旧枕故衾誰与共とぞ叶源

氏乃心也

あはれをいとゞしきれもさまねし涙のおくられて心のうちも

元古 壱ともまださらでりるをむまりとき紀床に給ひしてまつりて

弄 源氏の此床をけくられ思ふことけんちかくひまに亡魂をとふ

哥也　細 源の心れ切なるこゝろと思ふる也 源の亡魂をとふ給経

くるゝ物限をしのぶる彼蓬上は魂をもとめてはくるゝ也

かくこそしんかも此哥よみしさも花ちるらむ花かなにね
むのことゝひきもし此哥もんへちりの花のゝまひとおもひ
をもかへるものも此哥不叶也 狂 源氏物語ふかく葵の巻
をあらし給也 案 源氏の引うたんを男擬行のうちに安きさ
しかれ時よめるとも本哥此心と八重表ありとも又くるへ
思とみへり

又菊乃花さかりしせある頃に 河 以菊待ちの重ね白菊花を
詠すやめ此事常習也郢曲なとにも本字を改て菊
座の菊をと云も故実也古来より例也此物語中にも右
将軍葵草初秋とある詩を草初後葉と誦せり又白
氏文集和漢朗詠集に古集の句を文
字を改て入ることあり文選(モンゼン)連(レン)昌(シヤウ)貌一句(ク)獲(クワク)落(ラク)危(キ)攤壞(ヨウクワイ)
守秋有(ニヌアリ)殺風とあるを有殺色とかけり又樂天詩に可笑

穆房去熱到とある紙も不見穆房玄熱到と改られ
見よの例也と 秋 重しかも有と云詩ありこれも此ふし乃
事なりにおもひ

君なくてちりはまとねるとて夏此哥家にはひかく短秋ぬらん
とこ夏と床によせ也 案 見も源乃哥也常夏に塵
の縁あるを毎に此事也 細 をかき
ちりとひの花ちるらんしらせてまし移り也 花一日家栽り枯
移するる花とおもひて草枯の離にあるをもようと行て大宮
よなよく日しき花の枝のつまれ此中にもよのとて
とこも 弄 長恨歌此列のにあり 細 上の詞に枯ある下葉
の中にのこんとう撫子(ナデシコ)ありしかもとく有し此乃花也 秋同
宮よ皆くんせさを行て 弄 大宮よ左衛の乃んを給也
いとふひちる花を見ける物みくくさ散らしきたとくひせるに為

身をやハやとふらひなされて 細 葵上の事ハ無常の習ひ其数おほく
ありし宿業と思ひて歎きとまれともとすきたまひし逢ひし
きえし情のあはれさも猶さまくにとふらひ給ひし侍とや
次 左府旧大宮にも御別を力をおとして世移ての後ハ幽
契あさからずかゝるとせうをうちへてそのへあらとあめとらん
てハはかなくされの世と思ひやりはしるすんけまし侍るとて
日比まてくはしなりしさまくにたまひしと 半 んとこそたとへて
侍るまれなるうちにしそ世を立ちかへりてハはかなく先世のむ
くひとえひやう給とやさやうにとえひるすしてさしあけ侍ら
んとおもひ人とも月にそへて過しきしとや
ひたる御息所のつゝかゝるうちに御か給りけんすんあるは御心くく
とかく給へらるゝ一日なれやるも力を給ひとれくに持そもしきと
そとに侍るはむかしくとふひ給しと給ゆかの道あるまじるのみそ

ハかてらあはれ姫君んやまてともえまひ給へ給ちはす
給ふ歩まん名る御とれくしき人なとつとらるしなそ
細 源とうそ物ま見んおし侍るすやや
さめうちなれそるそろさむきさ女のきしきさるすりさくき
人くハ心くにむまあけしとのうちう哀なるさとくもうちか
まかひて 半 物られしき此ハ女の色をもさちてそろうさ
むきさ物とや又祢宜月の此ふるれ御ちもまきぬへし
展乃御目しの給ハむるやうに 細 打われしさ御まうしき人を
やまる里行へまてやを御目しるやや又展とうち滅源ま力る
あり御きとるなれ人とと力んまてもさ物し行へと人へくまの給
し事まやうけまみくもうれや
わうまんと力んまうてしそハるくはむ色うめれとさうすもいとそ
られさ須との法くるとにしそとて 半 夕霧をもいまうさそろ

あまりいともおほされハそれみてもなつかしさめつらしきとの心也
とのくおかしきさ海よりてくるしからんやいつもあはれいかなれ
わき逢行しむ陣と　細　女房たちの云也　孟　志かしの折と云ん也
とのきていかれなるおもしろき也　孟　我ともちや云也
源へまいる也行つれて　細　源乃院に来ある也　孟　源文法山へ法出也
いとつくみやまやもとにあり　孟　院の法山乃法詞也
法しなくくも日とかわるをさまやも心ざるへもとにおほしめして法
華みくものちとふいしせ給くとやうくやもおほしありかひ
みさきを行つるさ海云ようしるし　法し　孟　精云を成る也
中宮の法くるみ年のり行つれさんくめつらしきを見かたる
細　夜毒也　弄同
令嬢乃君んして　細　中宮の法ゝるきゝを庭而御前也
出ひはきさせぬるかぞ法頒とあるにつきてもいつかと法せう

うこゝゆのく行へり　孫　蓬生の歌とどひ行也
河古　為のくる家此取常もれとのことひはさぬ世中乃うさ
はひちま死世ハ今さるふも思給へまるまうしとめふちらく見侍り
つらにいとくるしき事おほしく云給へるれしもうきひくし此
法せらるこにちらしさめ給てあらん　弄　源中宮への返答也
細　源の詞也細く中宮よるきも法とあくひのまつしとみさら
をふかてもまで　細　此詞憑云也あらくへぬるなと云ぬ様なく
めるき　弄同　孟　あらく嬢るをいひて面白詞也
法しぬ思まにさふある法くしきとなるきそへくいと心さるし
あおり　孟　常此時さにきこしんくるしさにいとくとるきを給
夕しな文あり
むとんのうへ乃法をにみひとこれ法まてきさぬハ思へまうさ給ふる
やられもとくさ死やられる法うきひするきもあ海めくしさゆるき

て葵上はみくてのんにおはしまししとおほしめし也　新　さる
こある說もなくはなる御事をひとへにとかる所也
浩ちうそくおもはるゝなそ　新　服衣とゝ給ふや
細　花鳥云三ヶ月乃服なれは八月よりは十月をとやとて五除
服し給へるなといふ除服は忌ある事をも除服といへし是は
そくはへ参り給ふ衣裳（イシヤウ）をも改給ふなへし　定　二条院
東のたいにおはします也
　　　　　　　　　　　　細　二条院西對也
こしの方に立ちきて給へり
衣も色乃浩ちしひろまりちるくおほさやうにかなしそれなれ
人々くさへの有りさまをくさめやすくそのみちく
　　河　十月更衣浩特衣裳也
御納言とてありし心まとなれあけれ心みしすこ給此君
とらへしう打はくろひくおほし　細　ころやう此せつくひる

御服なり　花　無文のうへのきぬは夏は穀（ウスキヌ）冬は平絹色は常の袍の
ことし冠も無文也纓（ヱイ）巻もし服者の定なる也文無の
冠者検非違使一番常の冠は有文の羅（ウスモノ）也服者は無文の
羅を用る也といへとは冠のうしろまきてくろく物のする也　細　鈍服也
春宮にもひさしくまいらせ給はぬをおほつかなくおほして秋也て
そきかくて給ふ二条院におはしますくひみつさて御とこまへ
ちかふのたちも上臈ともみなまうのほりて　細　冷泉院也
あまたしも中将の君は頻みなまさしおとなしきにつきても
　　新　源氏の御也うち数ふ綾乃給よつきても葵上はたにつき
御ほしくくと思ひやるゝ給也
かの斎宮ちをもいしゝをはるをしきゃもそれはれたまふひと
らせ給ふ　新　またまはれる御事や　細　葵上はのかたの女房た
ちかみはかりし御給也　花　二条院乃女房そこもちもとかは給

と心をとゞめずして少納言のよく御覧じ定むるなり
箋 源ハにほひうつろひ給ふ時も見所まさりまさりて御覧ぜらる
まへしんや紫上のめでたきとぞ
ゐさしう見つる程はいとちかうきれしてもなど見ゆる姫君はなれど
てちかうひさ几帳ひきあけて見奉る給ふへしうちそゝのをとを
るみちちらくひ給ふる御ほとりぬるし 箋 源葵の中
陰乃君に紫上おとらずひ給ふとの心也
ほかざまの御心うつらしめうきさまとこその心浮気しからぬ
給人の御心はまださだまらず頼もしからずゆくうれども見給ふ后
いとう給ふちくまゝ給て見ゆれかれうはる程乃事
ともあるを少々給く月てろれ物語のとやうにさゝしまか
しみれど ほかざまのうつりさめ 細 有無によくよく給とぞ
いやうしう物語を給れども 箋 葵上を鄙と給ふ御方なれば

思召すや
さうしさうとうたにやもきゝひて年月まんとハこれなうかん
なり人なれど 細 二条院乃内東対なを数へしうちやもを
給ふうのや
いとをうしうさんかやほ御をまいんやをりてひやすし給ふをと少納言
かうれや少納言うらし 箋 何事も早にうちそへひ給ひて紫上の
源氏をいとどひ給ひなんとの心也
給わやしう思さこゆる 箋 源息所と始にて事外源の心と
うき給んくうれうつくしきさかの心也
御んことされ清少ひ不おほくはへひ給ひぬれてまる
まつりしこさや 細 事なる乃地也
さもう少給ちん思ふそ 箋 葵上ハなや世つゆ
彼さす又されよりもなる行く人なとのわりしき

も源乃御心をしんしやうちなれとも也立出かりり給ふらん心六
葵上ての云ふりりまちて可然人のましますさへとの心也人し
かくさむるらやかりけるふかりけるを行て　栄　少納言らとや
かくや細は源氏乃け給ふとふ事をかくさんとするや菩式
アり桃（ヒトニ）刹乃詞也　第まるは北地也
中ねの君やいふに法師しるとさいるときさしひくおほとのこ
まかとぬ　孝　源氏の東対へくけにくれ給ふを給也
細　源氏のすみ給ふ官女也御とくさすまりるとさきを給也
花　ともの御方のうつひの時西対まの給付しく人也　栄　ともさひて
ハさすると也やさて也源氏さくまる給人也
おもうにハかりの君は法文をまり給ふ義ある法のへをと
とかん給ふするも法さむせぬるすとものとさらんかとは法ましくに
ありめうちちのれと　花　夕霧の法親王とあるとなりるすや

栄　夕霧は法々そく源氏よりも法文をうち給
あすふやらすは法ありとも物うるとおほしくまりておほしとも
さらしれまた　栄　いかくるへも法世をひありさし給ひぬとも也
姫君のよすふるとも行しまりうとのひそくいとめて
さらうのこ見んとし給ふを　栄　葵上十四まぬ給とも也
みきをおうしぬほとにさく見れし行へれけともしむたさこよる
うすあるとおろさく心すくんこ給へと見んをも志るき行りぬうし
ことるりは法まくるるまくにさとくるすくふそくふうち
みきをおうしぬ　栄　十四まぬ給へしみあそぬ福すとも志る紀
也のんすて時くもしきしも給とも也
ゐんつきるをしつて日とくし給は心をへ乃らうくしを
あハこやうつきさそれこさとをふれるれ中みをしう何ふうき
まちもとこうそ行へと　花　古集あるとの文字をとうくして何

かんの文字をいひくわしくそふる給ふや　宗　はしめにいれは
たゝふくやかん〳〵はきかハ古集を思て其中に一字
いひ出て見給ふそいひやうのかんの何る字よりたとた
えひよりひとめ人の女字のに何りかうんうきと給へり
めて何うそふ事也
おほしきあうちきうとける年月をそふく成るゝ心かうり
なきのこ何りつれ　花　おさなきに彼のあそれ也
思ひくるくなりてんくるしかれとひてまたらん人の有ちめ
見たまりわくへきは見なふもあくぬに男君ハとくかくれ行て
女君ハ法くにわきさ給をぬ何とあり人くいかれまはらく
わかうくまれはあくんはちてちゝの事はちくは思ほさるゝくみやと
見まうあけくに　宗　おさなきに彼くそろ道を何ひ給
るゝのことふつれいつもやうくさらくなさを給ふるやいま

かうめてもかれハ心くるうせゆひあつりけるにをかひ給ふのん也
思ふらうそ給ふて　細　源の法くる人にわするうを給也
花　東對ハ以ての　宗　源氏後朝ハ西對より東對へ法出れる也
法きくるも見ぬとこそ治て都らにはしへくわりくにありく人ハた
くうりしてかけらもうゝきを給へるにまうそさかりすひ給へる文のゝ御
枕のをもたにけり何やとちなくひとさあそきてかん給へくと
花　文をさへて硯をもちよせ人かくとさ給仰のまゝいつる也
おやちうくもやさそてあるかれわとうさんをいわうるわりけるの事
細　源の君ハ給くいときは給ふる也　花　新ま枕乃出也　宗　紫上十四
宗　井見前宗乱を見ふく十ちうとよゝあり源十七才
の時也と其一ち也　宗　源氏乃寄陽なる所と八条と
秋をとふきわくうきわりてほとるとそやくしく出給へ
せうさもてさひ給へるやうなりうる新法心あうらん也

かゝるてをむかしよりかはらてかゝる心ならひをき
あつかひ給ふ　細　紫上乃心よりも源乃まい実乃うへ女御をかく見
給ひつれはあわりつきゝとさき給へきとおもひ給ふしに思乃
外なる給ふ也　弄　紫上乃源氏初給をとらへしとみるを
之給ふへし
うらなくなとのすゝむ物なとおもひゆるしてんをもあさましうなり
給ひさる読るつゝしまうる身を給ふなとおもひ給ふしあれん
さゆかしたるはちかちそてまふもこゝろもらそてはうくるしやと
てのそこさ給へといふよくはそひきさうさて身し給へらん
く君きうそ給ふはふくへいよゆ身を給ひてあるとうくいふ也紀
はまてちるしそ之ひのあなま心うるてそおりしそれあ人を
ゆくにあやしかたまふしんをまて　うらみれくたのまれ物に
弄　源とてもおやゝあると乃みやうに之ひ給ふしほとにかやうに

の給ひ也
御よはひさと見まきやうも給へれとはきたもとひとしてかく
をゐてうぬれ給ひつあふうるそこれはいと梳りしきわさよ
とてよ給ふ河まちしらへゆえて給へと渡まいとはつしとも給
てあの乃はいらくへとし給ひは　河　論語曰必有寝衣長一身
有半注曰孔安国曰今之被也又曰角枕粲兮錦衾爛兮文錦被

ヒ　ゴニ　ク　カナラス　アリ　イヌル　コロモ　タケ　ヒト　ミ　ユウハン　ニク　コウアン　コクカク　ノ　フスマ　エン　ワウノ　フスマハ　エン　ワウノ　チン　ニシキノ　フスマ

也　弄　とのゐ物のうすくとらう
よしくかしにかんしきましいとちうしあるとこゝんし給ふて
はまうらんもおきて乃ん給へと　弄　源氏のわさとくねり給ふ也
物もとあきれた　弄　源氏後給ふ乃はうる氏を奇乃紀やも也
われはきさ後やと給ふらく乃ん身より給ひて日一日へ給ひてあく
さめゆるし給へゆとうきうる紀はきしきいとくらうしきもとまり
弄　紫上此一向まきる世心付給をぬと也

そのよさるとゐのこ祝ふちゐるといふせそらうと　河
邪忌隠集
一日十月亥日作餅食之使人無病之　掌中暦曰亥子餅
七種粉　大豆　小豆　大角豆　胡麻　栗　柿　糖
くまうち思の報るれもちゐくしこさは後みしあつて
細　源のうへも入ちらいつせられるや　栄　葵上は悲傷の砌なれ
も祝物るとハいまさふらハぬすや
こちらこちらるにおくりをある　細　紫上もちるも也　孫　源氏
葵上乃服のほうれも紫上れはまくちうみとも
ひまるとこるるともちゐるとも見くらうみらるゝると哉て来
これこのかくれに出給ふ　惟光を召つる　ひまるとこ
栄　桜乃折るとうや
此まちゐうちらくにおもひたちうめくらてあまた書
よ集らせよ　河　亥子餅ハ色こと也三日ハ餅ハ白一色なれ

もろちくみてあらそとも　細　新枕の三ケ夜の餅也
事をとの給也
きのふをふかくしこさ日あり南るそおほろみその給ふを
しらば　河　重日と云也　細　南座の方まうらりはの給ふ
なへし　栄　何まてのられとの給ハんそゆめにの給とらへ
ねうれ物みてやまとひらるまぬ惟光そちうかたとうえ給ひ
らそ　栄　惟光か三ケ夜の事あやしやうそさこうとあるうる也
きにあハ新のもら給んを目えるすてもうるめまへまさる
みそそ　細　亀をも惟光兎合て中間也ゆうりくしこさ日と
の給ふをうきるると
さても様のこハいくりはりまりて給ふうらんをまゐなちて
やせよ　河　亥子此次日なれハ子のこ也惟光南座をかた
おもやあつくしちとの名目みてあくしるる　花　嫁娶也

三日にあたる夜餅を祝ふことにつく事ハ先んぢたるさうらぬ
るゝや人の死せる時にハ世俗にわすれ餅と備へたるさうもあり
枕はなしとめてわすれぬよしとなるや、さしもへと女の男に（死タル時ノメシナリ）
とらへよめへしてハ二たびかへ父母の家にかへらしとなれバ俗
先同究乃其を名付てわすれ也云文字にかへの字を用
ひさるハ女ハ夫の家を我家とさだめてさゆるやうに餅を
用るとはやがて男のもとにつくおちつかる心也嫁娶乃日
よりさき夜當るとを用るも此ゆゑや栄花物語中十
三の巻にもあり餅にそへのよし清て此内にさるを
あまく古く今つくれりけるつりとものゝちにまいらう
阿をれに力んしきを祝也とも法性寺殿の法女とかに一条
院にむかへらるゝを祝時の事なり也　細　實の女乃装（ヨク）目此なりけれ
をう射してかくる也縁台清らかならぬ裙にかよめれ

てらす也
三日かはとにみかくをおかんしとの祝なれ　河三日夜餅三
ケ一事ノ爲（ス）秘（ニ）事ナトニ一説云三日夜餅ハ女の年れ数を
調てそるや其上十四ちれハ十とも盛てそ余を四也
いかんとかも心にこれかひとつやいそれとるうえ束貞数（インニョ）
寛かるの物なるらハ惟光いれみもまうやこは其上
の年齢（レイ）惟光むて清るなや侍従ハ流浩入内三日夜餅
記（法大寺　左府記）其檀箱（文露丸　摺貝）普通乃硯宮よりハるさき大
さうもとなや銀小器三二白色の餅乃丸さを治蓋固（ハカタメ）此物具
盛（モツ）たるやうに三二同様にまいらすを盛て法箸（ハシ）の台ハ銀
みくく例（ス）演（ハジ）を作く露乃立たるに法箸をとうへさをて
法不行しかしにそるを出さるなり也
拾遺（捨遺）三ケ此夜乃もちゐハくはんしきつりつきをハすとのまえて

こうし也実方此餅又各別(カクベツ)也とか中　花　三ヶ一と読析に三杯
一具の心ばへなるをおやまれなる也昔ハ此餅四杯ありしを大
臣家也秘説有也別にあるにや　孝　三ヶ一ハさくまるとよ
む説あるとも云口伝在別　細　三ヶ夜の内此一也
水　嫁娶の三ヶ夜に餅を用ゆる事人の死せる時に法せるよ
しや偕老同穴の理也
心ときものにて　細　惟光ややそてふとりて立ける気色あるれ
さるゝ故やとおぼゆる也
物なれたる法よやと君をおほえも人みをいひてまつるさまい
さるゝと　栄　惟光を物よくいひ給へるとほめ給詞也
生みなくはゝらるまねならある　栄　惟光が家にて餅を
調るも又仰らるゝとも八物たちてかひ付ける様也
君をおしらんと人をひらく　孝　君を源の様態とも借ある

ちまきといへり
いまそしめてぬすきまてさゝめん人の心もちをきたるといとおかし
見て　河　伊勢物語云年をへてよりひわたるをあるゝ
らしてぬるをいそいとえうえなきあるさ
年比あはれと思ひきこえけるはかたはしにもあらざりけると
栄　契初給て後まへに此義ともこよひと思ひて数ふをあるぬと
なん也
人の心こそうたてあるものはあれ今ハ一夜もへだてんこと
とおぼさるゝ人さへおほゆるの給ひもちわるきにて
いとう契りしてまたいまれたるよ納言ハおはしまいりつて
つらしやおぼさんと思ひやりて　栄　人とハ源氏の御方
まうでこぬは也今此人いつれとも此とふる心也
心さしふかひて　栄　心ばへひとへして惟光が年しても也

むすめの弁といふをよひ出てこれたゝしのひてまいらせ給へとて
弁 少納言か女也
かうこのはこをひとつさし入たりたしかに御まくらかみにまいらす
へきいはひの物に侍 河 香壺 匣 或香粉匣 香壺
匣ハ定まる調度也諸香入器也 花 香壺なとにいる
あたにな 孟 香の匣をいはひの物といへる也
あやしとおもへとあたなることハまたならはぬものをと 弄 人く
にうつろふなとゝ云也 細 一本あたなることハあまりこれ
をもならへる事とも云也 花 あたなることハ不用之事へて
あるまし此女房の心へハたゝ見も給ふましと云也
はかりかたしまことにいまハさる文字いませ給へよとつれなく
細 弁ハあたなる事をまたならハぬといふ也 孟 さやう
に聊爾なる事ハいまたならはぬとそ也

まことに今ハさるもしいませ給へよとも給ひしといふ
わかき人にてけしきもえふかくおもひよらねハもてまい
りて御まくらかみの御木丁よりさし入たるを君そ例のきこえしらせ
河 あたなるを今ハいまはしといふ也 花 此詞をいむ也と
きこえて忌る詞とよむ説あり又一説ハ別にまいらせ
たる 細 別勘にあまた侍とハいへるといへとも
事あり人々さも花 去文字也あたなる文字なり
但一説あり 孟 あたハ弁かあたなる事をとかめし詞に
と取ハあまりせいすへきにあらす也よもましりはへらしと
らしとハ雑色ハ中ましりさとの事也
若き人のけしきもえふかくおもひよらねハ
花 源氏や惟光やうなるをとしめ給ふへきと也 孟 源の儀
よるいまとひのうちなとへて志給ふへきと也

せうへいきこそいみしけれは惟光か句也
はしめてみえたてまつりてけしきも給へかりそ　宗　早朝には右
のちにはちかくまゐる時人くのいひけるとや
河　合を退也
たてまつりし後されへくいひあはせなる事常よりもまさる
弄　ちくはらまかへくしや
清きことをたとへ河のきよみしいそうん　細　餅の名也
宗　女房達の見てるけしき也
花そくいとさまよりみくまちあれけしきもさてとさへてひと
わりきとくの人さやと　河　花足（ケソク）臺（ダイ）を筥（ハコ）の中に入ある也
細　臺のあしちすり
少納言いとかうしとやいひてそこひ申へきさをつれなかれは
かてし前なく物ほしいふ事ぬるのまるれけんなへとまゐるから
なりまぬ　宗　源氏の気色にまてにやことをこそいひかへ
せ給をいてゝぬるのもとすれけんにかとや
わくとらちくにの給いをうつして　花うちくまれらに
細　御まつの給まうし惟光のなへてんと少納言のいへるや
少納言らんや我よ御とみかりとしうとや
かの人をいつふたそりんとさくめれはへりかくてのちさき内よ
を進みをおくらぬけにはまうりを給へる程にたいりんおく
かりまゐりにもひしなれてあやしみんやとまれなるまうせは
さるうちひ給し所とよりをへいかめしきにかとろうし中
あまうはませいとわしとかけきとあれと
かの人　細　惟光也
ふ井ま枕のさるうちて夜とやるそてんをかけりまつ
あられそいとまのうきて

河 あふ事此頃まれなりて后をやへるそむかへるまくに
るやまうしきたのにまてなし行て 宋 作病し給て返
とまりくれるれとや
世中此いとうるをおほゆるかとむくしてあらんへすとみえし
まうへきとのこいへし行ほくをくるし行
宋 葵上乃別の事よをてのほとや
いかゞ后をて 細 ありさまてんや 宋 此詞へいまた后乃また勝
月夜の源氏よんかるおほるすをとちほるをとやへりあらし
されやことや
見てつき後たる紙との大将よれと心つまるほつる紙
花 勝月夜乃るや待らつきとの八内藤宴乃のち服なと
尋ちぬへきる頃や可遂大后の女れなる識や 細 勝月
夜や葵上ある取給しらりとみゆはとおもへるをとりよ

見給へとさもあれてんへ侍るとさひいつまと行へ侍るや
宋 此宮まてうにたくし見く奴給と見へさるまと
きこえさせくやむこまとおかりはるへまとうも給ぬめる紙
侍るとおもんよるをとうそもたれしうんるをおもくの給に
宋 葵上つとうを行へハ源氏と無事ふと太大后此給詞也
いとみくしやこひ中のし行て 并 ありさまてんの紙也
花 いま后へと云てまかく此詞にて侍るふくしやと見る
在し 宋 いかゞ后の源をとふさんしとや
宮ほくをもわさくし多いに出れし行へうそまとうあし
うんとまらしせなまんるすをと物ほしきこそむ 宋 しと后の心
よはり匣殿(クシゲ)を宮ほくに出しまいらせて源氏を無事
にと大后の思給をはまくうんとの企(クハタテ)奴へしおさく
しくハ古く集よ壬生忠岑長哥に との へまるあり

みつさまでと　わさくしきたるも　ゆきのこゝに　ちかきわたりの
あるかくハ　あしくの风と　さうたりき
河
長(オサ)物とはかさきを人はといゝてもちやうなるをとるゝり
伊勢物語　まうこかゝきれハ文をもおさくしらに
祢頼序云　はかしおさくしたれたわかりたるを頼あれ
ちうとも長き成ものとて人もおとなしくとゝらるゝ也に
わさくも此翔なえるあとへし
天もとしさへ所ゆらかなるおほさむしと　花鳥ハ源氏
のかたも源氏さまとハわかりきれとも此わか君ハとも也
宗
源の勝月をとも給ふ也
くちわしや物ほせと　宗　宮ほんの勝月をもゆかそんなる也
きくとハおもとかりたりく所法人をもちなくて　宗　はなとり
思付給ふ也

あふらハかうしろを見つゝかむしめる世にかくてこひたくまつり
きんへのうしみをおもてしろを帝り也　宗　猶もちかに
世にあるすこしのちやそ　お申也そくはなしはたる
めんとの源氏の法也
いとくおやうくほかりしもちよとにたると　宗　葵上の事にて
つらくゝ紫上をおやうさの也
かの宮をも法をいとくわしきれとさてとのゆかる人とあの
こゝろんかくて　宗　人の帽おつまゝしきりくやうてそのすお
のるすとしかあるたりぬるなるへし
かあらしほんともあへし　宗　風流なるてる心おそろしき
人かくましさせても宮人のかるへにき給ふきに人とも
年法のやうにかく見ほくし給ひたる人さわかしまおのし
何もあるへにそてハおもんなるとさほくにさとの日もハおほ

まうのありさまに　宗 ゑしよのそくいやうなくハり紙ハ又あひ
見るものをあはむとさのことハひとれも語りぬとも
此姫君を今まて世人もその人とも知きこえぬも物けな
きやうなり父宮にしらせたてまつりてんとおほしなりて御
裳着の事人にあまねくはの給はねとなへてならぬさま
におほしまうくる御よういなとありかたけれと女君
ハこよなう疎みきこえ給ひて年ころよろつにたのみきこえ
てまつはしきこえけるこそあさましき心なりけれとくや
しうのみおほしてさやかにも見あはせたてまつり給はす
きこえたはふれ給ふもくるしうわりなきものにおほし
むすほゝれてありしにもあらすなり給へる御ありさまを
をかしうもいとおしうもおほされて年ころ思ひきこえ
し本意なくなれはまさる　宗 この姫君　細 紫上也又宮ハ兵部卿宮也

あはれをまたしらぬ法気色見えられぬなさけしくおほすにと
に　引哥　弄　細同
河 御遣まする行のことのはしも宗見ゑされハ御心にまかせてまゐられる
宗 紫上のあはれハまた御心ゆるしなき事也
年もかへりぬ　細 源氏廿二歳上十五歳也　河 弄同
はいかうの日ハ先院の御方にまいり給てそ　宋 先父御へ
まゐり給ふて常のことくまいれる例とも也
内春宮なとへもまいり給ふそれより大殿にまかて給へるにお
とゝあたらしき年ともいはすむかしの御ことゝも聞え出
給ひてさう／＼しくかなしとおほすに　宗 内とハ御門の朱
雀院也　春宮ハ冷泉也
いとゝかくさへわたり給へるにつけて念し返し給へと忍へ
かたうおほしたり御年のくはゝるけにやもの／＼しきけさ

へたて給ひてなへてよりはこよなうにきこえ給ひつゝ見えたまふを
宗 源氏のこゝろのうちを語る也さて年比姫君と思ひをそへし
さにそありけんとなり
年比はうちとけてもなりたまはすうちそむき給ふ
忍ひありきを御覧しつらんものをとてまつりこえ給へは
ものを 宗 葵上の御こゝろ也
ちかう侍ひけるもあはれなりそのほとのことともなと 花散里
の人々のことも二さいや
春宮の御ありさまのうへなとゆへよしありきこえたまへは
御心はへにあはれにおほしたるまゝに 宗 故院の御遺言
給ひし源氏の御身の上を御心にかけて申す論語也
みそかなる御ありさまをいひよするなにかしのやうにあやしく
かゝる事そとこえて内にはかしこき宮の御こゝろにて

御いく 河 挽歌(ハンカ) 延喜式 諒闇也 礼記曰男子不同挽歌今
案葵上在生の時は諒闇ハ同様にてあるへきにあらすとは
といふやうに女ハ礼記の文来不可叙也何 哥あまりなき也
細 諒闇也ほとの也 宗 いつれもそのほとの物也諒闇く成ものを也
春宮ハ御心の思ひ給へるうちのかくたるをしや給へるにもあん
あらくなるとはものゝ給ふて 細 色よりもこの大宮よりの領也
宗 大宮よりのとは彼乃領也葵上のなき給ふ詠に結句源氏
方へよりかゝるゝ中く一入のおもひといふと也
もろしにありし御ありさまのよきを見給ふにつけても涙す
きてよりかへりてなほひきつく御さまを思ひ給ふと也
かれと 宗 葵上在生の時乃きくにはとかく思へりつれハ
今度の悲傷に涙ちかく深も思ひもなく
思ひ給ふとおほせとなき也

きふちかうとハ御やつれ姿も給へむそてハさうしをおもひしくし給
ゐる物とも見えさせ給てあはれ給へり　細　妍なる詞也
宮ていけしきとも法服ハあをにひなる人々さへなきぬるを
やつれ給へとや　箋　畢下して大宮此の給也
くるしけなるまつ人をさや相ひしもある　細　七日の忌三乃男
とてこそし給ほしんとて其段給也　箋　源氏の心也
なまめきハめさきむかうるをとりけり
法下ゆかしたハ文ともよりうちとのみ又あかしく法出とたつるとひゐる
くやハとてさくへ給ふ　箋　くやうに思ひて又用意し給と思さて
かうひとすく大宮乃思ひ給りんとや
こ法しまかしくちわしうおほされましき心ろうし
細　今日源の法出なくハ口わしかる人さきうしや　箋　今日や
うに法しるそひまて漣く大宮乃下給給又法出なくハ

口わしきおほさんとや
法くりみて　箋　大宮人の法返答也
去やこさぬるかをとまいはしんやしまたにすんすいうと給ひつ
れゆとみつ給へいてらうるすうとおほくてえ雲しさを給ふ
もを　細　源の詞也かなるうとらすれとや
河大梵　おさしたぬるさとしと百年かきやこさぬるかをなるそうまく
細　下句義也去年にうつりゐるうしや　箋　源氏やこうの
ハやしくに法ならひと思ひとし給とのんやさてとよ
とおもふるん又ハまたに画うくかりらへし
あはれかしきおもしき色ともさて八歳て知る心ちする
えらそといひ給へしつめぬかもかく給へり
弄　源氏の法出の中れるすとへり
御かへりし

葵

はかなしき事なといひけるを聞えぬ人のなきことなり

細
大宮の事也哀傷面に出して書たる也以何とみる葵

上の事の心にあるなり 新古今哀傷とて入たり

以の桃園とのことなり只春の曙の見えて余りせむの

心なるを見るも悲しき也 花 哀傷も深きを尤

のなとも

たてりけるをきすにそありしぬや 既 作者詞とものの跋

傷の後にかへりひまもなりけるへし 花 源氏葵上い

つれとも聞えて言ひまかしける世の大宮の人なり

ぬし

九十四終